
悪魔の絵本 3 女帝【逆】（タロック編?）

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の絵本3 女帝【逆】（タロット編？）

【Nコード】

N3615H

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

女王と同じ顔のせいで、故郷を滅ぼされた少女ティルト。女王に復讐するため奴隷として王宮に入り込む。女王を殺そうとしたことで何故か彼女に気に入られ、ティルトは死のゲームへと招かれる。片や復讐、片や唯の暇つぶしではじめた賭け。掛け金は互いの首。首刈り女王と復讐鬼。憎しみの中から生まれる絆はあるのだろうか。真相説明タロット編第一章。

本編とSUIT編完結まで矛盾が生じそうなので、現在更新停止中。

ブログ Homo homini lupus .

> i 2 4 3 1 1 — 3 8 3 <

奴隷を一人買った。面白そうな男だ。見目も悪くはないし、言うことと為すこと、これがなかなか面白い。

しかし残念だったのが、コレが男ではなかったことだ。

だから、私はひとつ遊びを提案してやった。何、簡単な遊びだ。もしこれが私を本気で惚れさせたら、望み通りこの命を差し出そうというもの。

何、惚れるはずがない。退屈な人生の、暇潰しのゲームの一つ。勿論私が勝ったらこれの命は露と消えるのだが。

せいぜい楽しませてみよ。父上が飽いているように私もまた、この浮き世に厭いている。

本当に、お前が“愛”とやらを教え、信じさせてくれるのなら…

…それは、勝っても負けても悪くはないのだ。

「妾が憎いか？」

噛み付くような手負いの獣。その刃のような危うい光を宿した瞳。私と同じ赤い赤いその瞳。それが狂気に染まっていく様を見つめるのは良い暇つぶしになるだろう。

「ならば殺してみるが良い。もっとも……其方に出来れば、の話だが」

さあ猫よ。私を楽しませて。喜ばせて。

私に全てを忘れさせて。この退屈から私を解き放て。

そう、その目だ。もっともつと私を見る。私を追って来い。

そんなものではまだ足りない。もっと、もっとだ。

私を憎め。私を呪え。

その怒りを瞳に宿し続ける。

それでもお前は私に堕ちてはいけない。それは、退屈へと変わるから。

面白い玩具、もっと私を愉しませて。悦ばせて。

それでもお前は所詮は愚鈍な人間。いつか終わってしまうだろう。それなら猫よ、愛しい猫よ。

終わりはこの手でお前に捧げよう。

私がお前に飽いたその刹那……その時こそお前を殺してあげるから。

O : Homo hominilupus .

タロツク王国の姫である絶世の美女刹那姫。彼女はセネトレアの王と婚姻し、王位を奪った。人々に私がそう囁かれるのは、王が結婚数ヶ月で変死したため。それは今から一週間前のこと。結婚の条件を守り王の遺した遺言通りに、私はセネトレアの女王と君臨することになった。

今の私には全てがある。

この手の中に入らない物など何一つ存在しない。

地位も名誉も権力も。富も金も人望も。私が望めばすべてが手に入る。私は神に愛された娘なのだから。

純血の姫でありながら、私の生まれ持つ美貌は世界一。混血共が束になるうと私には敵わない。何も自画自賛したいわけではない。幼い頃から飽きるほど、そう口説かれ言い寄られてきたのだ、嫌でも理解する。

男という生き物は実に浅はか。そこが愛しく、憎らしい。

私が差し出せと命じたものを、奴らは何でも差し出した。死ねと命じれば、奴らは喜んでその首を。ああ、つまらない。つまらない。どうしてこの世界は、私の思ったとおりにしかないのか。私の予想を決して越えない世界。それは退屈の固まり。それならば……面白いものに作り替える？それとも壊してしまおうか。

人の心さえ意のままに操れるこの知能。私の手にかかれば、人も世界も操り人形。

戦争だって平和だって私はいくらでも生み出せる。だからこそ、退屈だ。

だれか私を楽しませてくれる者はいないのか。それならせめて耳に心地良いその悲鳴と断末魔。存分に聞かせておくれ。

私は脚本を描こう。考え得る限りの残酷な物語。それでこの世界を真っ赤に染め上げよう。それはきっと私の胸の渇きも潤してくれるはずだから。

「……………さあ、その者の首を刎ねてしまえ！」

*

壊れた玩具は要らない。だって新しい物を買えばいいだけだから。

今度はどんな玩具を飼おうか。
髪も目も珍しいモノが良い。美しければ尚良い。気が強ければますます悪くない。

「姫様、本日のご公務は……」
「ユリウス、後は其方に任せた。其方の采配には間違いはないからな」

寄ってくる家臣共をその一言で押しのけ、私は煌びやかな玉座から腰を上げる。視界にはいるのは苦虫を噛み潰したような黒髪黒目の青年の姿。

重い溜息を飲み込みながら、それは私に向かって言葉を放つ。

「……またですか、刹那様」
「何だ？妾に意見するかユリウス？」

それが何を意味しているかを知っている奴は、「進言です」という屁理屈でそれをさらりとかわす。

「貴女に何を言っても無駄なことは重々承知していますが……せめて夕餉まではお戻りください。貴女のために腕をふるっている料理人達が哀れにございますから」

「何、間食くらい許せ。食は長き退屈な人生の良き友。城の料理も勿論食そう！鳥の羽根で戻してでも喰らってやろうぞ？」

「食材が泣きます。生産者が泣きます。いいですか刹那様、今の世界情勢の中これだけの食材を確保するのはこのセネトレアといえど……」

「妾に儉約をしろと？無論、嫌じゃ。金は貯め込むためにあるのではない、湯水のように使うためにあるのだぞ？これらも使われた方が嬉しいから」

「……………はあ」

「そう落ち込むな大臣よ。そのために其方が居るのだろう？精々頑張るが良い」

「頑張ろうとも貴女様の浪費癖にはキリがありません！いい加減自重なさってください」

「むう……………嫌。口ではそんなことを言っても其方も内心嬉しいのだろう？妾のために苦心し頭を捻り働き尽くせる喜びが内から滲み出ているのが見えるぞ？」

私がそう言うてにこりと微笑むだけで、奴は耳まで赤くして言葉を失う。所詮はこれも唯の男ということか。

（なんとも分かり易い奴じゃのう……………これはこれでつまらん）

見え見え過ぎる。私に突っかかってくるのはその方が私に好印象を与えると、知っているから。そこまで自力で気付いた洞察力と頭の中身は褒めてやれるが、いかんせんわざとらしさが抜けきらない。

奴の中には私への好意しかない。憎しみが無いのだ。だから、つまらない。

所詮あれも同じ。私の外側に惹かれた阿呆だ。中身なんて見ていない。私の中身がどんなに最低最悪でも、それが外見で補って余り得ると考えるのは愚か者のすることだ。

これでユリウスは有能だから生かしてやっているが、そうでなければとうの昔にお払い箱だ。

憎しみの宿らない愛など、愛とは呼べない。

私を心の底から憎めない以上、本当の私を愛することなど出来ないのだ。誰も。

愛故にすべて許せる？愚問だな。そんなものは唯の偽善だ。

愛していても許せない。愛していたからこそ、この手で殺してし

まいたい。

そんな強い感情。それがきつと、愛なのだ。
幼い私は全てを失い、それを学んだ。

母上は、父上の正妃だった。それでも父上は、母上を想って下さ
らなかった。

父上は異国の血を引く女を愛しておられた。けれど、その女は父
上を想ってなどいなかった。

「本当は優しい人なのよ」、そう何度も母上は私に言った。父上が
そうでなくなつたのは、あの女が父上を裏切ったから。

ある時父上は、愛していたはずの女との子を、私の異母弟を殺め
られた。

そしてその一年後、父上はその女さえ葬った。そして、その頃か
ら父上は本格的に壊れたした。

まず、それを止めようとした兄上まで殺された。悲しみのあまり、
母上は同じ炎に身を投げた。

それは私が9歳の時の話。狂おしいほどに何かを欲する心、その
狂気、これこそ愛なのだ。私は父と母から教えられたのだ。

私は独りぼっちになった。そして、父上も。

だから私は父上を誰より愛した。

母上の分も…父様が何より欲しがったあの女の分も、異母弟の分
も、代わりに私が与えてあげたのだ。

やがて私は父上の寵愛を一身に浴びることになった。

望めば手に入らない物など何もない。それだけの地位も、金も、
権力も、策も私にはある。

歯向かう者も、同じ褥で戯れの愛など語れば人などすぐに操れる。

けれど忠実で有能な駒ばかりに囲まれてもつまらない。

思い通りにしかならない世界。すべて、掌で転がせるだけの才と運を生まれ持つが故の憂鬱。愚民共には到底理解できないこの悩み。奴らに同じ事が出来ない以上、愚民が私になれない以上、奴らが私を理解できるはずもない。

（ああ、つまらない）

私は、私の予想を覆すものが欲しい。この息の詰まるような退屈を慰めて欲しいのだ。だから私は私とはまったく違う者を好む。

よく城から抜け出ては街へ行き、奴隷を買う。飽きたら殺す。その繰り返し。

今日も新しい奴隷選びにベストバウアーの奴隷通りを私は歩く。

後ろからついてくるのは二人の契約騎士。腕も立つし城の者より余程使える。何しろ私より金に目がくらんだという無礼者。実に面白い。これで美男だったら言うことないが、そうだったら私が手を出していた。そうなれば末路は同じだ。だからこれはこれで良いのだろう。

さて、今日はどうしようか。

若い男は良い。年下なら尚。奴等は良い瞳をしている。あの城にいた大人達のように汚れ、濁りきった目ではない綺麗な瞳……

しかしそれも長くは続かない。私を知った者の末路は、皆……あの目に成り下がるのだから。

あれと出会ったのは、そんないつもの行楽の中。

人だかりの中。籠の中の子供。それはどこかで見た面影があった。目、顔、大きさ、髪の色まで同じ。汚らしい姿でも、それは私に似ていたのだ。

（ああ、姿見のようだな）

目の前の姿と、記憶の中の忘れられた姿が不意にぴたりと重なった。

かつて私には異母弟がいたらしい。もつとも見たこともない。気がついたときには殺されていた。せめて死に顔だけでも拝んでやろうと思ったが、それも叶わなかった。なぜならその棺はどこかへ消えてしまったというのだから。

だからそれを思い出したのだ。退屈を紛らすために、一度は思った下らない幻想。

もしかしたら、彼は生きているのではないか。そして、父上を、私を怨み…その牙と爪を研いでいるのでは。いつか私を殺してやろうと…

(もしそのようなことがあったら……それはとても面白い)

それでも異母弟は黒の髪ではない。瞳だってこんな夕日のように鮮やかな赤ではなかったはずだ。

(鏡か……ふむ、そういった趣向も悪くはないやもしれぬ)

己と同じ顔の者を相手に出来る機会など、一生の内にそう何度もあるものではないだろう。

「その者、気に入った…いくらだ？」

「いえ、これは既に引取先が…」

口ごもる商人に、私は悠然とふんぞり返って言い放つ。

「構わぬ！おぬし、妾を誰と心得る！？我はこの国が主！刹那^{サメク}」
「セネトレイアであるぞ！」

あまりの言葉を失った店主。それ白紙の紙を突きつけ、希望の額をいくらかでも記すがよいと放り投げる。

「あんたが…女王…？」

私のことを鏡を見るようにあつけにとられていたそれ。
しかし、私の名乗りを耳にした途端、私を見る少年の顔つきが変わる。

それは初めて見る顔だ。私に見惚れるでもなく、その赤い瞳は憎しみを映し出す。

（ふむ…これは姿こそ我に似ようが、この目はまるであの子猫のようだな）

海の方こうの青い瞳の少年王…いずれ狂王を打ち倒すための駒。
それにこれはよく似ている。

手の上で踊らされようが、彼の瞳は私に屈しない。彼は決して私を愛さない。

その裏切り。それが私が彼を好んでいる最大の理由だった。僅かながら彼は私の憂鬱を晴らしてくれている、ああ、愛しいな。だって、手に入らない者ほど愛しく感じるものだろう？

「喜べ下賤の民、今より御主は妾が愛人ぞ」

「はあ!？」

素っ頓狂な声。同じ顔だというのに、なんと色気のないことが。
笑い飛ばしたくなったが、何人たりとも私に対する無礼は許さない。

「我を拒む者には、死を……それが嫌なら我を愛し、我に仕えよ」

細い首筋に突き付けた剣。口を固く閉ざした少年は問いに答えなかった。

けれどその赤い瞳は激しい憎悪の色を宿したまま。それはあくまで私を拒絶するつもりらしい。

（奴隷風情が…こんなことは、一度もなかったというのに）

少々プライドが傷付いた気もするが、それ以上に私が感じていたのは背筋が胸の奥まで震わせるような不可思議な感覚。

「…面白い」

凜と響いた私の言葉に、商人も商品も目を丸くした。続く言葉に彼は、どんな顔を見せてくれるだろうか。

「気に入ったぞ！其方を我の第一愛猫にしてやろう！」

セネトレア王ディスクのもとにタロツク第一王女刹那^{サメク}「S」ター
 ロツクが嫁いだのは悪魔のゲームの始まる半年前。婚約したのが更
 にその半年前だったという。

そのころの私がそれを想像できただろうか。これから起こるすべ
 てのことを。

たぶん、無理だ。今だつて信じられない。この一年間、ずっとそ
 んなことの連続だった。人を憎むことも、殺すことも……一年前の
 私には想像も出来ない遠い世界のことだったのに。

皮肉なことだ。あの頃の私は常に虚ろな瞳をしていた。空っぽだ
 った。私の内には何もなかった。

今の私には、それがある。この身を満たす憎悪と殺意。どちらが
 良かったかなんてわからない。答えを出したところで過去へは戻る
 ことなんかできない。だから私は前を見る。唯前だけを、あの人だ
 けを見て……

*

太陽の昇る場所という名のタロツク王国が都、デクストラニアか
 ら離れた小さな山里ステイブロッド。夏は暑いが、冬も寒い。

冬は近隣の街との行き来が不可能な程、雪が降る。外へと続く山
 道が雪に閉ざされてしまったためだ。

長年の戦で焼けた国の中にあり、緑の残る貴重な財産。

それがステイブロッド。食料を生産率が限りなく0に近いこの国
 の僅かな食生活を支える農民達が住むその村に、私は生まれた。

狩猟と農業を営みながら男は冬場は傭兵として街へ出向き、女子
 供は副業の藁を編み、村を守り男達の帰りを待つ。

そのため冬の戦力はまだ傭兵にならない若い少年達。

彼等は盗賊や獣から村を守るため、幼い頃から山の獣を相手に実践を積み、大人達に戦いの術を教えられながら育つ。

そして20になれば、秋の収穫祭の後村を出、雪解けの春まで外で傭兵となる。セネトレアまで行けば職にも十分ありつける。

しかしあの勅命が出てから、事情は変わった。

農村における貴重な担い手である労働力を殺めること。それは口減らし以外にありえないことだ。

戦のためには食料は必要。いくら狂王といえど、自国の食を支える基盤を失うのは痛手だったのか、いくらかの譲歩をした。しかし、それは残酷な譲歩だった。

王の言葉は、“村に男子が一人生まれたら、その身代わりとして村の年寄りを上から一人ずつ殺せ”というもの。労働力にもならず、貴重な女子を生み出すための手段にもならないそれならば、いくら失ったところで王は何も困らない。

その勅が布かれて10年。生まれながらに罪を背負わされた子供達の目には、暗く沈んだ陰がみえた。おそらく、私も彼等と同じ目をしているのだろう。毎年行われるその儀式。生きていることは、生まれてくることは罪だと私たちは教えられながら育っていたようなものだ。

生まれた時に誰かを犠牲にしなくても、今こうして此処にいて、生きて呼吸をしていること。それも、同罪。

私たち子供は、誰かの犠牲の上に胡座をかいて生きている。それを肌で感じながら私は今日も、汚れた土の上を歩くのだ。

国の使者は桜の咲く季節に村を訪れ、一年に生まれた男子の数を

調べ、老人を焼いて帰って行く。

あんなに綺麗な花なのに、悲しみを運んで来る花。

花に罪がないのは知っていても、あの花が咲かなければいいのに
と毎年のように思った。

その時、私は13になったばかり。その頃から私の家に、商人が
訪れるようになる。

あの勅が出たあたりから、村に来る行商人の数は増えていたから、
女の私が彼等の目に留まってしまったのは仕方がないのかもしれない。
い。

「子供なんて生まれなかったと言えば良いんですよ、私にあの子を
預けなさい。次に殺されるのは貴方の父様や母様かもしれないので
すよ」

親思いの大人達にそう囁き、相場を知らない村人に唯同然のはし
た金で子供を買い取れる。それに味を占めた商人達が桜が散る頃か
ら秋までひっきりなしに現れた。

そして彼等は腕の立つ若者を傭兵として外へ連れて行くようにな
り、村は農業よりも傭兵業が盛んになった。

その方が効率も良い。金が手に入ったら、役人に賄賂渡し、老人
の処刑を回避することだって出来るかも知れない。

そう考えた村が、傭兵を始める年齢を16才まで引き下げたのは、
人員不足によるものだった。

しかし私の家に現れる商人は彼等とは違い、家の天井まで届

くような金を積んでは私を欲しがった。他の女子の家にもこんな大金は出さない彼等が、どうして私をここまでして欲しがるのか。

しかし…どれほど金を積まれようと両親が私を手放すことはなかった。刀片手に物凄い形相で商人を追い返す父。逃げ帰る彼等を笑いながら入り口に塩をまく母。そんな二人が…私はとても大好きだった。

父が外の仕事でいない時、何度か私は誘拐されそうになったこともあったが、私は無事だった。そんな時必ず私を守ってくれる人があったから。

それは2つ年上の兄のフエイロウだ。

この頃にはもう、稀少となった女子。私を女らしく生きて欲しいと願った父は、私がどんなに頼んでも剣を教えてくれなかった。その代わり、父に隠れて私に剣を教えてくれたのも兄だった。

「いつ俺がいなくなっても大丈夫なように。自分の身を自分で守れるように、強くなるんだぞ？」

…そう彼は私によく言った。兄はあと1年で傭兵となる。

それまでに私は彼を安心させられるくらい強くならなくてはいけない。長い髪を切り、男の格好を始めたのは…誘拐防止の他にそんな思いがあったからかもしれない。

村の子供の中で一番の剣の使い手の兄。その兄に五度に一度は勝てるようになった頃…兄は今度の秋から村を出ることになっていた。そしてその年の夏が終わる頃…私に新しい弟が生まれてしまった。

その頃村にはもう…老人が居なかった。

これから村はどうなってしまうのだろうか。他の村のように、赤子達が殺されるのだろうか。

それとも働き盛りの若い衆が殺されるのか。村は不安に包まれた。

そんな時、現れた一人の商人。彼は悪魔の如く囁いた。

「もしこのお嬢さんを我らにお譲り下されば、何不自由ない生活を送らせて差し上げます……もちろんあなた方の生活も支援させていただきますよ」

彼はセネトレア最大手のペンタクル商会の頭であるペンタクル。

彼は私を引き渡しさえすれば、毎年村が望むだけの老人奴隷を村へ捧げると言う。

それはつまり……私一人と引き替えにこれから先、村の人間が誰も死なずに済むということ。

この話に、両親は悩んだ。

何せ、今度生まれたのは自分の子。責任を取れという村からの圧力もあった。

それでも兄は、兄だけはそれに反対してくれた。それがたった一人だけでも、嬉しかった。剣の稽古でだって泣いたことのない私が、号泣してしまったくらい……嬉しかったんだ。

けれど人の形をしたその悪魔は、言葉巧みに村人の心を掌握していく。いつまで私がここにいられるかもわからない……村は不穏な空気に包まれる。

そんなある日、兄に誘われ狩りに出かけた。

村人に会う度に向けられる視線に気落ちしていた私の気晴らしをつもりだっただろう。

「弓の方も、随分腕を上げたじゃないか」

射落とした獲物を見、兄は満足げに笑う。しかし私の目には、獲物から流れるその赤が焼き付いて離れなかった。今まで当たり前のように殺してきた動物たち。彼等は村にとって貴重な食料だ。

生きるために当たり前のことをしていただけ。

それでも人は生きるためには、自分ではない何かを犠牲にしながら生きていかなければならないのか。

その瞬間、私は動物たちを…人間と変わらない、同じ一つの命だと認識してしまった。

狩りをするものにとって、それはあつてはならない……愚かなことだ。それはまるで世界がひっくり返るような衝撃。

さっきまで空を飛ばしていた鳥。

まだ、生きている。苦しそうにもがいている。

目があった。黒い、綺麗な瞳だ。私とは違う。

そこに絶望はない。生きる希望、生きたいという心からの願い。

そこには、炎が宿っている。生きる意志だ。

それに魅入られたかのように、私は弓を手放し…じっとそれを見つめた。その体に触れてみると、まだ温かい。

当たり前だ、生きているんだ。動いている心臓の音。

こんなにも強く、生を願っているのに…それを殺めてしまっているのか？

弱っているから？弱いから？それだけで…

あの老人たちも、死にたいとは思っていなかっただろう。きっと生きていたんだ。死にたいなんて思うわけがない。だって、生きているのに。生きていたのに。

「何やってるんだ、馬鹿！」

黒に染められた世界を一瞬にして、色を取り戻させる声。

兄の剣が走り、その首を大地へ落とした。

恨めしそうに転がっていく首。それでもあの瞳から、生の炎は消えなかった…最期まで。首が宙を舞い地に触れるまで。その刹那の時間が、とても長く感じられた。

「式面鳥の嘴には、毒がある…教えただろ」

生を願う者は、最期まで諦めない。勝ち取ろうとするんだ、自分の意志で。それを私は、知らなかった。

「死にたいのか、馬鹿」

兄の声も、どこか遠くから聞こえるようだ。こんなに近くにいるのに…私は、一人だ。

血の繋がった彼であっても、どんなに近くても…同一ではない。同じじゃない。だから、兄には私が、私の気持ちはわからないんだ。

（だって、…今……兄貴が何考えてるのか、わからない）

私のために怒っている優しい兄の顔が、今は…生を貪る死神にか見えななんて。

（死にたいかって…言われても……）

死にたいわけない。だって生きているんだ。それでも自分より生きたいと思っている者を殺してまで、私が生きている意味って何？罪悪感に苛まれて、呼吸さえ凍るような一瞬。

死にたいなんて思ったことはない。

それでも、生まれたかったと思ったことだって…一度もない。

ただ、いるだけ。

昨日“いた”から、今日ここに“いる”だけ。

なんで“生きてる”んだ？私は…

生きること何かを傷付け誰かに迷惑をかけるだけなら、いつそ人間なんて、私なんて死んだ方が良いのだろうか。いなくなっちゃえばいいのか。

奪うことしかしてこなかった私が、生きて誰かのためになるのなら、私はあの商人についていくべきなのかもしれない。

「おーい、聞いてるかぁ？」

その瞬間、目の前で掌をひらひらさせている兄の図が目に飛び込んで来る。

ああ、いつもの…兄だ。黒の世界が遠ざかっていく。

叱られたことで私が落ち込んでいると勘違いした兄は、大げさなくらい私を褒める。

「最後に気を抜いたとはいえ、…まあ、強くなったじゃないか。うん、よくやった！流石俺の妹だ！」

「……全然だよ。剣だつてまだ敵わないし…」

せっかくの兄の配慮だというのに、まったく気乗りできないままの私は申し訳なく感じ苦笑した。

（やっぱり…わからないんだ）

似てても、同じじゃないんだ。

同じ果物が好きで、同じ景色が好きで…同じ野菜が嫌いでも、すれ違っている。そんな気分が悲しかった。わかって欲しいのに。誰よりも、貴方に。

それなのにこの人は、私の心をまったく理解していないのだ。

自然と笑みが消え、私は彼を見つめる。

父に似た赤い目の私と違い…母さんと同じ黒い瞳。

あの獣と同じ色の瞳。

でも、違う。

真っ直ぐな目をしていた。嘘偽り無く、あれは生きていた。

兄は私に言えないことを、隠している。

何か言いたそうに、それでも何も言えずに。だから私に何も伝わらないまま。

「兄貴……」

こうして見つめていれば、いつかわかるのだろうか。それとも永遠にわからないままなのか。

そんな私を見ていた兄は、何か思うところがあつたよう。彼の次の言葉はただの気まぐれではないだろう。

「剣…試してみるか？一回限りの真剣勝負」

いつもは三本や五本勝負。結果の見える勝負なんてまったく馬鹿げている。

「兄貴が勝つに決まってるだろ」

溜息ながらに私も剣を抜く。

だって兄は言い出したら聞かないのだ。

「やってみねえとわからないさ!」

言うや否や向かってくる兄。それを迎え撃つ私。

(速い…)

兄は細身で足も速いし、身のこなしも軽い。繰り出される剣撃を防ぐだけで手一杯。

刃がぶつかる度、腕に痺れが走る。いくら細身とはいえ、男と女だ。力の差は歴然。純粋な力じゃ敵わない。

(だったら…)

より素早く。繰り出される前に、私が攻める。

前へ飛び出し、一気に距離を縮める。兄の剣が脇を掠めるが、気にしない。

寒さで痛覚が麻痺しているのが幸いだった。

(片手で足りないのなら…)

どうせ力じゃ勝てないのなら、両手で剣を支える意味はない。

手数を増やすことに専念するべき。

私は刃で兄を狙う……に見せかけ片手を外した。

「……っ!？」

振り下ろした左手が狙うは兄の手。

神経が集まる指先に狙いを付け、手刀を撃つ。

僅かに指が離れたその瞬間、兄の得物を奪い取る。

兄にはもう武器はない。それを突きつければ私の勝ちだ。

「……俺の、勝ち？」

二本の刃先を彼に向け、私は静かに笑う。

どうしてだろう。身体はこんなに熱いのに、心は冷え切ってしまった。
っている。

うれしくない。勝ったのに。憧れていた兄に、一発で勝てたのに。

「……油断が命取りって教えただろ」

不敵に笑う兄を見た後、世界が揺れた。

「……え」

(…これは、毒!?)

どさっという音。私が地面に伏した音。

「安心しろ、ただの痺れ薬だ。獣用に持ってきたんだが、まさかこんなことになるとはな」

話は聞いたことがある。村を出るときに渡されるという毒剣。柄に施したいくつかの細工を弄れば、瞬時に刀身に毒薬を纏わせられるという…。

兄は村にいたのに、どうして？

(…まさか)

16。早い者はもう春の内から村を出される。身重の母を村が気遣ったことだと思っていた。でも、違かった。私のことがあったから、兄は…仕事を断り続け…私を守っていてくれたのか。

「返して貰うぜ」

そう言いながら刀を取り返すと兄は片手で柄を握り、私の傷口にそっと触れる。

すると身体の痺れが取れていく…これは解毒用か。

「攻撃も痛みも恐れないのはおまえのいいところだけださ、誰もが
おまえみたいに馬鹿正直で真っ直ぐじゃないんだよ…世の中には卑
怯者が沢山うじゃうじゃわらわらんさかごまんといえるんだ、覚え
とけ」

「…兄貴こそ」

自分のことを棚に上げて言う兄に、私の口から笑みがこぼれた。

「まさか、真面目で正々堂々が服着て歩いてるようなおまえがなあ
…流石の俺もお前があんな汚い手使ってくるとは思わなかったぞ
？」

あんなことを思いついたのは…今回が初めてだった。
いつもは兄に追いつきたい一心で、必死に食らいつくことしか考
えていなかったから。

（でも、ちがう）

今回は、そんなこと考える余裕なんて無かった。

心にかかった黒い霧。

勝ちたいとも負けたくないとも思わなかった。ただ、目の前の人
を…ぶちのめしたかったのだ。例え、どんな手を使ってでも。

なんでそんなことを思ったのかは、…今はもう思い出せない。そんな些細なことに私は苛立っていたのだろうか。自分の器の小ささに自分で自分に呆れてしまう。

「兄貴が俺をどう思っているかは知らないけど、俺はそんな…綺麗でも真っ直ぐでもないよ。俺もその卑怯者の一人だってことわかったんじゃない？」

「ばーか！考えてみやがれ…普通、‘私ってとっても綺麗な人間なの’って自分で言うような奴に、そんな奴がいると思うか？違っただろ？」

変なことを言い出した。反論出来ないような変な例えを持ち出すなんて…やはり兄は卑怯かもしれないなかった。

（確かにそんなひと…嫌だけどさ）

兄の言葉を想像してみてもぞつとする。

「おまえは優しいんだよ…優しすぎるんだ」

「自分よりも他人を思えるってのは良いことだ。他人の痛みも辛さも自分のことのように感じる事が出来るってのはある種の才能だ」

兄が言うように私は、私と他を分ける境界線があやふやなのかもしれない。

どこから私で、どこから他人か。

苦しみ、悲しみ。伝染する感情。流されてばかり。それならば、本当の私は何を考えているの。わからない。

私にとっての世界とは、私にとって…この目に映る物すべて。それが大事なのに、愛しいのに。

世界は私を同じようには思っていないのだ。

わかってもらえない。それでもわかってしまうから。

痛いんだ、苦しいんだ。悲しいんだ。泣いてしまいたいんだ。

「それでも、そこにおまえがいなきゃ何の意味もねーだろう？その優しさを少しは、自分に向けることを覚えろ…じゃないと安心して旅立てねえだろ俺が！」

「だから心配なんだ…これでも一応、俺はお前の兄貴なんだから」

胸を揺さぶる言葉。見上げた空の、沈む夕日が目にしみた。

命を貪ってここにいた私が…生まれ初めて、ここにいてもいいと誰かに言って貰ったような気がした。

私は今、悲しい？だって泣いている。

でも、心は温かい。嬉しいの？

どっちが本当の心なんだろう。まるきり反対。別の感情。

どっちが私？どっちが偽物？

わからない。

わからないけれど今この瞬間…私の心は、この感情は私のこの手の中にあるのだと…私にはわかっていた。それだけは確かに…嬉しいことなのだと私は理解した。

涙を拭いもせず夕日を見つめる私の横…何も言わずに兄はそこにいてくれた。

その時は、私の心に久しい平穏と確かな温もりを与えてくれる。静かに草むらに腰を下ろし、同じ空の色を眺める兄。

別存在である私たちが同じものを見て、感じることは別だろう。それでもそこに流れる時は、先程までとは違い…私にとって不快ではなかった。

暫くそうしていたが、沈黙を破ったのは兄の方だった。

「あんなわけのわかんねえ胡散臭い奴隷商人が、お前を欲しがる理由がわからねえ…」

それは常々私も思っていたことだ。

「確かにお前は俺の妹だし見てくれはいいかもしれないが、所詮は田舎の芋娘だし教養の一つもない。貴族様が好むような毛色の混血でもねえ。かといって、もうそろそろ15にもなる娘が男装してても違和感がないくらいの平面体型じゃ愛玩用にされるはずもねえ。特技と言えば男顔負けの気の強さと喧嘩っ早さと喧嘩の腕くらいだ。いくらタロツクの女が貴重とはいえ、山の向こうも海の向こうもこんな嫁さんは願ひ下げだろうさ」

「結論は？」

散々な物言いだが、とりあえず遺言くらいは聞いておいてやろうか。

「要するにお前なんかを欲しがるのは、余程の変態しかあり得ないということだ！兄としてそんな奴におまえを渡すわけには…」

今怒っているのは、世界ではない。私自身だ。
自と他の境界を教えてくれた、貴方に感謝しよう…墓の前で。

「要するに兄貴は今日を命日にしたいわけだ」

言いながら瞬速で振り下ろした白刃は、顔面すれすれで白羽取りをされてしまった。流石…腐っても、傭兵見習い。

「やるじゃ…ねーか、兄貴」

「お、おまえこそ、それでこそ流石は俺様の弟だ！」
「妹だつての！」

適当に私が放った蹴りは、見事に兄の鳩尾にヒットした。
兄の言うよう、剣だけでは兄に負けるかもしれないが…喧嘩技込

みの問答無用の勝負なら私に軍配が上がるかもしれない。次に何か言って来たら鳩尾なんて甘いこと言っていないで股間でも蹴り上げてやろう。

「やつといい表情になつたな、お前」

しばらく苦痛に呻いていた兄が起き上がった時、彼は満面の笑みを浮かべていた。別に何か変な趣味に目覚めたわけではないようだ。

彼の言動から彼のペースへと、いつの間にか乗せられていた私が居る。さっきまで沈んでいた私の心も、考え事も、どこかへ吹き飛ばしてくれていた。

兄が言いたかったのは……言葉ではなく、剣を交えることによつて……伝わることも伝えられることもあるということなんだろうか。

「なあ……こんな村、捨てちまおう！ ティルト、お前もさ！ 俺と一緒に傭兵やって暮らすんだ」

「でも……」

それから兄は何度も私を説得した。しかし、優しい両親や幼い弟たちを見捨てる決断が、私には……どうしてもできない。

それでも……兄がくれた言葉が、空っぽだった私の胸にひとつの火を灯している。

ここにいていいと言ってくれたのは兄。

こことは、場所じゃない。村じゃない。兄の、隣だ。

それなら私は…私にとっての世界とは、兄のことなんじゃないだろうか。

目に映った景色は切り捨て、ただこの人だけを見て…歩いていけば良いんじゃないか。

あいまいな境界線。世界が自分で、自分が世界だった私。一人きりだと感じていた世界。

両手に抱えきれない程の、大事にしたかった物。守りたかった物。…私を好きになって欲しかった物。

目に見える境界が布かれ一人きりになった世界。それに1増えただけ。

それでも…たった一人でも、私の望む全てに…私の世界になってくれる人が居るのなら。

私はその人と共にあるべきなんじゃないか。

「兄貴……」

「ん、なんか焦げ臭えーな…“秋の焼き畑焼き物祭”はまだ先じやなかったか？」

私が言いかけた言葉は、彼に伝えることなく…私の内に飲み込まれてしまう。だが、また言い直せばいい。

（傍にいるなら、いつだって…）

「まさか……処刑？」

兄の物騒な言葉に私は浮ついていた気持ちをしまい込む。

「でも、最近じゃ滅多に処刑なんて……」

老人が狩り尽くされたこの村で、処刑はしばらく行われていなかった。

「……まさか」

嫌な予感は拭えない。生まれた弟。……彼の身代わりは、誰？

「兄貴！」

「ああ、行くぞテイルト！」

狩猟場である山側の村の入り口。

それが見える場所まで着いた頃、目に入ってきたのは村を飲む込む炎の渦。

人々の阿鼻叫喚。鼻につく……嗅ぎ慣れた何かが焼けこげる臭い。それと嗅ぎ慣れない、錆びた鉄の臭いが混じり合う。

その燃え盛る火炎を、手下を従える黒馬にのった男が…満足そうに見つめていた。

「考えてもみよ。ますます女兒の出生は減っているというのに我の命令を農奴風情が特例扱いなど…どう考えても、気に入らん！食料など失われてもどうにでもなるう、海の方こうから奪えばよい」
「もし貴方様の国になにかありました折りは、このセネトレアがお力添え致します」

男の横で揉み手をしている小男に、私も兄も見覚えがあった。

（あの…商人！）

村人を操り、私を売らせようとしていたあの男。

「頼もしいのう…セネトレア王」

男は商人を従え、濁った目で嗤う。

（セネトレア王！？あの…ペンタクルが！？）

「あの男が、セネトレアの…王だって？」

隣には私と同様、驚きを隠わにしている兄がいた。

「いや…考えてみれば辻褄が合う…くそっ、もつとはやくお前を連れ出していれっ…」

「違う…」

それは、私が迷っていたから。兄のせいではない。
悪いのは私なんだ。いつも、いつだって私が悪いんだ。

「例の件…お願いいたしますよ、須臾王」

「女一人など、我は失おうとも構わん、おまえにくれてやる」

男の言葉にペンタクルは満足そうに媚びた笑いを浮かべていた。

「女以外は叩き斬れ！…いや、面倒だな…農奴風情、あつてもな
くても同じ事」

男はあっさりと言葉を撤回する。

「全て焼き尽くせ！！女子供も斬り捨てろ！」

その言葉のすぐ後に、炎の勢いと悲鳴が増して……悲鳴だけが次第に小さく掻き消されていく。私も兄も、そんなものを見せられてじつとしてなんかいられなかった。けれど、今にも駆け出しそうな私の肩を兄が痛いほど掴み、行かせてくれない。

「いいかテイルト…ペンタクルの言ってる女は、きつとお前だ。山に戻って…奴等が引くまでじつとしてるんだ」

「兄貴…兄貴はどうするんだ!？」

聞く前から、答えはわかっていた。

「俺は…父さん達を探しに行く!」

「無理だ兄貴っ!」

嘘だ。兄は嘘を付いている。あの鳥と同じ、真っ直ぐな目。でもそれは…死を前に、存在しない希望を信じようとする者の瞳だ。

「無理じゃねえ! 例え無理だと思っても、そんなことは言っただけを言葉にした瞬間に、出来ることも出来なくなるんだ!」

兄の言っていることは、無茶苦茶だ。だって理解できない。

（そんなこと、信じられないよ！お兄ちゃん…）

「だから、俺は大丈夫。必ず帰る。父さんも母さんも…弟たちも、きっと無事だ」

もはや手遅れだって事は、二人ともわかっている。それなのに彼は平気でそんな嘘を言う。信じられるはずもない。どうせ言うならもっと、上手な嘘を吐いて、私を騙してくれればいいのに。

「言わないとわからないか？足手纏いだって言ってるんだよ」

これも嘘だ。さっきよりは上手い嘘。私が足手まといなのはきつと本当。それでもみんなを助けに行くのは………きっと嘘。だって手遅れだって解っているんでしょ？

嫌だ。どうしてこんなことばかり、わかってしまっただ。嫌な予感しか、当たらない。

「嘘だ！兄貴…兄貴は、あの男の所に行くんだろっ！？」

村を燃やしている…あの男を兄さんは許さない。きっと、あいつに剣を向けに行くんだ。

私のために村を憎んでいたけど、兄さんは…この村を嫌いになんかなれていなかった。

「俺も行く！一人じゃ駄目でも、俺達二人ならきつと…勝てる！
勝つんだ！だからっ…」

（だから私も連れて行って…お兄…ちゃん）

境界の引かれた世界に、一人で生きていけるほど…私は強くはなれない。その溝を知らない頃には、戻れないのだ。それなら私は……

（死んだ方がずっと苦しくないよ）

縋る私に兄さんは、憂い顔。彼は小さく口を開いた…
その瞬間、私の首筋に迷いのない手刀が振り下ろされる。

気を失う寸前、兄さんの口は私に“ごめんな”と言っていた。

1 B r e v i s i p s a v i t a e s t s e d m a l i s f i t

ティルトは俺っ子です。でも心の中では私とか言ってます。男とか女じゃなくて、周りから一人前の人間として見て欲しいという気持ちで彼女を俺口調にさせています。ですが内面は心優しい普通の女の子です（私に普通の女の子が書けないせいであまりそうには見えませんが）。

「ここ、は…」

目覚めた時、私は狭い檻の中にいた。私の籠の右にも左にも同じような籠があった。

少しの隙間。その向こうにまた、沢山の籠が積み重なっている。

（これは…奴隷馬車か？）

その隙間に座し、私を見つめている男が一人。

「お前は…ペンタクル!?」

「奴隷商人ペンタクル改めセネトレア王ディスク。以後お見知りおきを…お嬢さん」

「どうして俺を…助けたんだ」

私の言葉に、男は嫌らしい笑みで答える。

「貴女は金のなる木…貴女を欲しがる者は世界中にいる」

「どうして…俺、なんだ…」

私は普通の農民の子供。稀少価値の高いタロツク人の女、唯それだけの者ならいくらでも……とはいわないがないわけではないだろう。彼が私に固執する理由がまったくわからない。

「キヒヒ……わからないって顔だねえ。それは……貴方の、その

顔だよ」

「顔？」

怖気の走るような男の笑み。彼は、私を人とは認識していない。私達が狩ってきた獲物に向けるような目とも違う。

ああ、あれだ。

収穫の時期に、村人達が見せる顔。作物が例年よりいい値段で売れた時の顔。あれをもっと濁らせたような目。

“モノ”を見る目だ。

「私もその噂を聞いたときは疑ったよ。しかし実物を見、それを受け入れた」

「貴女はさる高貴な方に瓜二つなのだ。彼女のファンは皆、貴女の前に黄金を積むだろう」

村を思い出し、蔑むような目で彼は言う。

「あんな片田舎じゃ、美的センスもずれているだろうからねえ……どうせ多くの子を産む女がいい女だとも思っているんだろうあの農奴どもは。正に金剛石の原石のような貴女の美しさも、偶然出会わなければあのまま土に埋もれていたかと思うと……小汚い鄙びた村に足を運んだ甲斐があったというもの！」

「……金のために、村を燃やしたのか？！」

この男は、人の命をなんだと思っているんだ。生きている。生きて呼吸をしている。同じじゃないか。同じ、人間だろう。

何処が違っただ、この男と……みんな。金があるか、ないかだけじゃないか。

生きてることは、変わらないのに。それなのに、どうしてこの男は……そんな酷いことが出来るんだ？

(……………あの人は)

気がかりなこと。聞きたくない。それでも、聞かなければいけない。

あの男の傍にあるものに、見覚えがある気がするのは気のせいだと必死で自分に言い聞かせながら私は重い口を開いた。

「……………兄貴は、どうしたんだよ」

待っていましたと言わんばかりの、にたあと薄気味悪い満面の笑み。

「恐れ多くもタロツク王に斬りかかったのです。死は免れませんがしょうねえ……きっと素敵な処刑方法で裁かれたことでしょうね。貴女がもつと早く決断してくだされば、こんなことにはならなかったのですよ……フッハッハッハ」

私の、せい？

私が迷ったから？

私が……兄について行こうとしたから？

村を、みんなを見捨てようとしたから？

だから、神様が罰を下したの？

(いいや、違う！)

みんなを殺したのは、この男だ。村を焼いたのは、この男だ。あ

の濁った目の男だ。

神様なんていない。いるのはただ……この男みたいな、醜く歪んだ……最低な人でなし。

（人を人とも思わぬおまえこそ、人ではない！人の形をした悪魔だ！）

そんな悪魔に人が、虐げられ……搾取されること。それが世界というもののなか？

それを世界と呼ぶのなら……私は……

（そんな世界、いらない。おまえなんて……いらないっ！）

「返せ！それは……兄貴のだ……！」

「嫌ですよ、売ればこれだってそれなりの金になるんですから」

（兄貴の刀……お前なんかが気安く触って良い物じゃないのに……っ）

返せ。

返して。

お願い。返してよ……

奪ったものをすべて。あるべき場所に。

（私を、兄貴を……村のみんなを……）

こいつらが、大人を歪めたんだ。弟たちをあんな瞳にしたんだ。私たちから希望という希望を根刮ぎ奪い、僅かな希望を見せて……絶望の車輪を回させ続けるんだ。

狂王と、奴隷王。

偉い人たちは、人を道具のようにゴミのようにしか思っていない。

それでも、私たちは生きているんだ。苦しんで悲しんで、傷付けられるためにじゃない。

きつと、いつか幸せになるために。

そのために…人は生まれてくるんじゃないのか。そうでなきゃ…この世界に、救いなんて存在しないじゃないか。

悔しい。泣くことしかできない自分が憎い。どんなに睨んでも、男は嗤うだけ。

獣に成り下がってもいい。

悪魔という名の人間達に比べたら、獣の方が余程いい。

爪を立てて喉を切り裂け。首筋に牙を立てて、食いちぎってやる。

燃えたぎる憎悪を瞳の赤色に宿して私は男を睨み続ける。

男は折から伸ばす私の手がギリギリ届かない場所で、そんな私の観察を続けていた。あの、濁った瞳で。

「しかし我妻の頭脳は実に素晴らしい。あの狂王をいとも簡単に従わせることができるとは…いやはや」

その悪魔の言葉には、涙でにじんだ私の視界を一瞬にして開かせるくらいの衝撃があった。

(…妻?)

私の村を滅ぼした…あの狂った炎を宿した男は、この男の掌で踊らせられていたというのだろうか。

そして、その妻。私はもう一人の悪魔の存在を知る。

「お客さん、あつしらも同業といえど…ちよいと口が過ぎるんじゃないませんか？飯にもここはまだ、その狂王の支配地ですぜ？」

御者の言葉で、ここがまだタロックであるらしいことを知る。しかし村から一度も出たことのない私にとっては、馴染みのない風景ばかりが続いていた。

「おや、金は十分に払っただろう」

「なるほど、口封じつてか…お見それしました」

御者は陽気に笑う。悪魔に比べれば幾分朗らかな笑い方だった。

「しかし、こちらは綺麗な方ですね」

そんなこと初めて言われた。そんな場合ではないのに、私の鼓動は僅かに早まった。

御者はまだ年若い青年だ。兄よりは2、3上かもしれない。

しかしディスクの仕事の手伝いをしている以上、彼も悪魔と同業者なのだろうか。それにしては…瞳が濁っていない。

（お互い初対面のようなけど…）

「ははは、まあな。ん？おまえ、おまえこそなかなかいい商品を運んでいるじゃないか」

商品の価値がわかる男に悪魔は機嫌をよくし、彼の荷物を見回し、それを見つける。

ディスクは一つの檻の中の少女に目を留めた。長い黒髪に紫色の瞳が神秘的だった。

少女がじつとディスクを見つめると、彼は魅入られたように彼女を見つめ返した。

「おやぁーお客さん、こいつを気に入ってしまいましたか？こいつは高いですよ？」

「此処まで見事な色の瞳は見たことがないな……混血は好きではないのだがね……これ程ならばうちの後宮に入れたいくらいだ」

少女の値段を尋ねながら、ディスクは少女の籠に手をかける。籠に入り込んだ指…それにぴたりと少女の白い手が触れた。

「ん？何かなお姫様？」

「金の亡者……哀れだな」

少女が一言呟くと、男は白目を剥いて倒れ込む。

「お代はあんたの命……つてもう聞こえてねえか」

「依頼、完了……」

その瞬間、沢山の籠の中から歓声が上がった。

「リーちゃん流石！いつ見ても鮮やかなやり口だね！」

「しかし見事な変装ですね！」

「まーまー、どーどー……おまえら落ち着け！馬より暴れるってどういうことだ？あんまり騒ぐなって……事故っても責任とらねーぜ俺は」

ケタケタと笑いながら、御者は籠の騒ぎを振り返る。

「あ、あんたら……一体……？」

「おお、良く聞いてくれたな…俺達は…」

陽気な御者の言葉を紫瞳の少女が止める。

「アス力、おまえは前を見て運転しろ」

「えゝ俺とお前の仲だろゝ」

「……抱きついてやろうか？今は両手が血まみれなんだが」
「わーったよりフル」

どんな仲なんだろう。

それが良いのか悪いのか、初対面の私にはわからなかった。

「？」

いきなりの言葉。

その言葉はその青年の方へと向けられているようだ。

近くの籠から一人の少女が出てきた。金髪からカーネフェル人だとわかる。

「え…鍵」

「鍵開け縄抜け手錠抜け…それくらいのことならこのみんなは誰だっでできるよ」

先程の声の主らしい少女はくすくす笑う。

なんだかここには陽気な人が多い気がするのには気のせいかな。

「まー馬鹿はほつといて、説明してあげる」

金髪の少女がにこやかに微笑む。

「私たちはセネトレアじゃ泣く子も黙る暗殺請負組織^{スイート} SUIT…
聞いたことくらいはある？」

「……知らない」

「まあ……あんなド田舎じゃねー仕方ねーって俺らも出沒しない
し。まだ俺らの村の方が活気が……」

否定はしないけれど自分の故郷が何も知らない初対面の相手に馬
鹿にされるのは複雑だ。

相手に悪意がなさそうだから、余計に。

「空気読め、馬鹿」

「痛っ…なんだよアスカのくせに」

御者の青年がため息混じりに、黒髪の少年の頭をはたく。いい音
がした。

「いや、いいんだ……」

私は静かに首を振る。まあ、事実だ否定しようないほどの。

「要は暗殺と盗み専門の犯罪組織。今回のターゲットがこのオッサ
ンだったってこと」

少女の革靴が、動かないそれを軽くつついた。

“モノ” 扱いしていた人間という存在から今かれは、“モノ” 以
下の扱いを受けている。

少女の笑顔のままの動作のせいか、まるで“それ” がさつきまで
は人間だったものとは思わせない。動かない。

死んだんだ、本当に。

あんなに憎かった男が随分あつけなく死んでしまうものとは。少し拍子抜けしてしまう。しかし簡単に…これで仇は取った、はい…めでたしめでたし、とはいかない。

私には帰る場所がない。村は燃やされた。家族も兄も、傍にはいない。

彼が生きているのかもわからない。かといって、行く宛もない。お金もない。

すべて、この男に奪われたのだ……

この怒りは、どこへと向ければいいのだろう。

「この馬車はこのまま船に乗ってセネトレアに向かうワケなんだが、おまえさんはどうする？」

「あいつの雇った奴隷馬車はこれだけか？もしかしたら他の馬車に、俺の家族も…」

そうであつて欲しいという願いを込めての言葉だったが、青年は苦い顔で答える。

「俺達は首都からやってきたが、あの奴隷王の手配した馬車はこれだけだ。奴が運んできた積み荷はあんただけだよ…」

「俺達の頭は奴隷制と誘拐がなにより嫌いだな…人さらいの手引きはしないのがモットーなんだ」

「村の様子を見に行きたいならこれから通る街に降ろしてやってもいい。…もつともみれたもんじゃないと思うが」

「セネトレアに着けば俺達の仲間も大勢いる。カーネフェル方面の船なら乗せてやれるぜ？」

「シャトランジアの聖教会なら、君みたいな人を受け入れられる

けど。それはここも同じかな」

「帰るところがないならうちで置いてあげてもいいよな、リフルさん」

聖教会？始めて聞く単語だったが、少女が私を気遣ってくれていることはよくわかった。助けになっしてくれようとしているのだ、見ず知らずの私なんか。口々に彼らが言う言葉。それは全て私のため、そのただけに作られた言葉だった。その親切さをどう受け取って良いのかわからない私は、酷く混乱していた。そのせいで私はそれをそのまま口に出してしまう。

「……どうしてそこまでしてくれるんだ？俺は……他人だろ」

戸惑い気味の私に、金髪の少女と黒髪の少年が優しく微笑んで説明してくれた。

「うちのボスは、身寄りの無い子の味方なんだよ」

「もともとそういう奴らの寄せ集めの請負組織だしな」

なんでも彼らはセントレアのどこかに混血のための街を一つ作ったらしい。そこをアジトとして、居場所のない者達をそこに住ませ、……それを養うための、盗みと殺し。狙うのは悪徳商人と性悪貴族だけだという。そんな組織の長が、こんな私より細い腕の少女だなんて信じられない。

しかしよくよく思い返してみれば、この少女はどういう技を使ったのかは知らないが、奴隷王を一瞬で殺してしまった。見かけによらず、本当は強いのかも知れない。惚けたように彼女を見つめる私に、少女は気まずそうに目をそらす。

「……あんだ、女のくせに凄いな！」

「……………」

私の言葉に馬車の中は笑いの渦に飲み込まれる。

頭と呼ばれた少女は、鋭い眼光で私を睨み付けようとしたが、目が合わさる寸前で目を伏せて……溜息ながらに自分の黒髪を掴んだ。長い黒髪の下から出てきたのは、銀髪。……いや、銀に見えるけどあれは白金だろうか。だってそんな色、聞いたこともないし見たこともない。だってあり得ないじゃないか。

その時私はこの目で初めて混血を見たのだった。だからその様子をとても印象深く覚えている。その人は肩の辺りまで伸びた綺麗な髪を耳の後ろで適当に束ね出す。そして露出の多かったドレスを脱ぎ、彼は全身を覆うような長い袖の服に身を通す。両手には黒い手袋をし、口元はマスクで覆い、長いマントを身に纏えば……明らかに怪しい人物のできあがり。

「ね、わかった？」

にたにたと笑いながら話しかけてくる金髪。それまで青色だった彼女の瞳はいつの間にか……猫目石……いや、虎目石によく似たものに変わっていた。彼女も混血だったのかと、今更気づく。混血とは言っても……こうしてみる分には普通の人間のように。もの凄い大爆笑をしていたその子の目には笑い泣きの跡が見て取れた。

それに反して、もう一人の混血は……無言を貫き馬車の外に視線を向けていた。その様は無感動とも見える。感情を殺している？いや、でも絶対怒っているに違いない。だって私だってそういうことを言われたら怒るし傷つくから。

「……………す、すみませんでした」

着替えの最中みた身体、すらりとしていたがその胸は私以上に真っ平ら。それが意味する答えは一つ。

「気にすること無いって、私だって最初は間違えたし」

「あ、俺も」

次々に籠の中から上がる声。

少年はとても綺麗な顔なのに、その声達に渋い顔になる。

「仕事のための女装なんてよくあるし、間違えられるってことは良いことだろう？それだけ見事な変装名人って事なんだしむしろ誇りに……」

「……出来るか！俺はこれでも十八の男なんだ、嬉しいわけあるか！」

頭は御者に扮した青年の背中を蹴り上げた。そうしているとさっきまでの無表情な人と同じ人には見えない。普通の、子供みたい。そのやり取りに、自分と兄の姿が重なって見え……不意に私は泣きそうになった。

それを遮るのは、ふと耳に残ったその言葉。

「……十八？」

目の前の少年は……私と同年か少し上、十四か五くらいにしか見えない。背だって私とそう変わらない。その答えに頭を悩ませる私に話しかける、その少年。やっぱり同年くらいにしか見えないのに。やっぱり、混血って不思議だ。

「運賃代わりに聞いても良いか？」

「え、あ……はい」

「別に気使わなくて良いよ。うちのボスってばあんまり敬語好きじゃないからさ」

黒髪の少年は私に向かってけたけた笑う。さっきから彼はずつとそうだ。今まで気付かなかったけれど、もしかしたら私を…元気づけようとしてくれているのかも知れない。

「あんたの村を襲ったのは、タロック王と…このセネトレア王で良かったんだな？」

「ああ、間違いない……」

銀色にしか見えないその色の少年が、私に念を押す。それを肯定すると彼は「そうか」と一言言ったつきり黙り込む。それがバトンタッチの合図だったかのように、御者が自身の考えを話してくれる。

「奴隷王はお忍びで来たようだが、あつちは軍を率いてきたから……もしかしたらあんたの知り合いの行方は、タロック軍が知っているかもしれない」

「いや…あいつは、女子供も殺そうとしたんだ。生き残りなんて……」

そう言いかけて私は思い出す。

（そうだ、兄貴…兄貴はどうなったんだ？）

奴隷王の言ったとおり、狂王に向かっていったのだとしたら…

「……悪かった。こいつを殺す前に吐かせれば…もっと何か力に

なれたかもしれない」

ああそうだ、ディスクはそれを見ていたんだ。それならばその一部始終を知っていてもおかしくはない。

「いや、…あんたのせいじゃ、ないよ」

口ではそう言ったが……いくら拭っても拭っても自分の手じゃこの涙を涸らすことはできなかった。

たぶんそれが出来るのは……ここにはいない、一人だけ。

*

私はセネトレアの街で、彼等と別れた。彼等は私に一つの情報をくれた。

その情報を頼り、私は真実を確かめることを決めた。
別れ際彼等は、一つの小瓶を差し出した。

「もし行く宛が無くなったら影の遊戯者^{シャドウ＝メーカー}って酒場のカウンターで、その小瓶を開けて……」

「そうそう！それを飲んで目を開ければ…また会えるから」

「これって…？」

「ああ、これはね……」

ひそひそと耳元で教える少女。

「はあ!？」

「大丈夫、死んだ前例はないから」

「詳しくは言えないが一種の勇氣試しだよな、あれは」

「ああ、俺の時から通過儀礼になったんだっけ？」

「そう、フォース君のせいでね」

「え！？俺のせい！？」

「つまり……それだけの覚悟はあるかってことだよ……人を殺めることは、それだけ重いことだから」

ふっ笑った少女の顔に影が差す。

「裏町はいろいろ物騒だしな。普通に協会に逃げ込むのが一番だと思っただが……最近協会は問題だからなあ」

青年は苦笑しながらため息を吐く。私を気遣ってくるそんな仕草に、私は彼に最後まで兄を重ねてしまっていた。

（それにしても……）

暗殺集団というわりに、変な人が多かった。いや、暗殺集団だからこそこか。もし全てを見失ったら……その時は、彼等の世話になるかもしれない。

別れ際……銀髪の少年が私に教えてくれたのは、五ヶ月前セネットレアに嫁いだタロックのお姫様の話。

その姫とは、奴隷王ディスクの妻。

私の村を焼いた策を練った人物。

「貴女は、そのお姫様に……似てるんだ」

ディスクが言っていたのは、彼の妻のことだったらしい。

別れた後、少年と青年が交わしていた会話の内容。

勿論それを、走り去る私の耳まで聞こえることはなかった。

「どうも今回の依頼は…きな臭いな」

「ああ、もしかしたらあの姫の片棒を担がされちゃったのかもしれない。じゃなきゃ…あんな偶然あり得るか？」

「ああ、……あの娘は悪くないというのに、触れてしまいそうになった」

「……憎んでいるのか？」

「憎んでいるさ」

「いつか必ず、この手で裁く。狂王も、あの女も……俺が、必ず」

同じ名前をもつ少年と少女の束の間の邂逅。

「女帝」は本編の約一ヶ月前から始まります。故にSUIT編では「隠者」「死神」を終えて、これから「悪魔」へ向かう束の間の休息の時期。「魔術師」でロンリーになったリフルが仲間に囲まれているのはそのせいです。もしかしたらリフルにとって今が一番幸せな時かもしれません。

そしてあっさりお亡くなりになる諸悪の根源その一、セネトレア王。トーラが今回の任務に同行したのは復讐が終わるのを目の前で見たかったから。あっけなく終わった復讐に笑ってはいますが、復讐を終えた興奮と得体の知れない空虚と、内心複雑な想いを抱えていることでしょう。血も涙もない悪魔だと思っていた男も、所詮は脆弱な唯の人間にすぎなかったのだと。

ちなみにここにいないメンバーはアジトの守りをしています。

「……俺、いくらで売れますか？」

そういつて奴隷商の店に入ってきたのは一人の子供。

商人が連れてくるでもなく、一人で現れる子供というのも珍しい。

もつとも、ないわけではない。稀に、貧しい家に生まれた親思いの子供が、家を飛び出しその身を金に変えに来ることがある。このように……ん、ほう……これはこれは。この子供は少々違うようだ。

これの心は、そんな思いやりではなく……憎しみの炎と真実を求める探求心。

知りたいか。知りたいだろう。これにはその権利があるのだから。

しかし店主は目を丸くした。最初は私も驚いたものだ。ああ、やってくれたな……壱の神。

奴はそんなに私の見せた世界が気に入らないのだろうか。

しかしこれはどちらに転ぶのだろうか。この子供はまるで、賽の目のようだ。これが生み出すその数値は世界を零にも壱にも導ける。面白い。この子供は、あの私の手駒の血を引くあの娘を……どう変えていくのだろう。そしてその物語は、私に何かを遺すだろうか。

僅かでも良い。壱が信じた希望を私の目にも見せてみるがいい。

＊

気まぐれで美しい姫を相手にすることは、死と隣り合わせ。

しかし例え紛い物でも、夢を見ることはできる。何しろ…それはあまりに似ている…あの姫そのものだ。これなら…偽物でも構わない。破産しても構わない。

彼らは皆そう言っているようだった。誰かの代用品とはいえ、自分のために高額な金を積んでいく人々を眺めるのは不思議な気分だった。物としてしか見られていないのに、誰かから必要とされているような錯覚に陥りそうになる。でも、それじゃ駄目だ。私がしたいことはそんなことじゃないのだから。

店主は私の顔を見て、驚いたようだった。

前金として私が求めた品を言くと、商人はにこやかにそれを差し出した。

そしてすぐさま私は競売にかけられ、落札された。彼女のファンに買われた後、そこから情報を得ていこうと考えたのだ…が。流石にこの展開は予想しなかった。だって、まさか自分と同じ顔の女に自分が買われるなんて…誰がわかるか。

「その者、気に入った…いくらだ？」

「いえ、これは既に引取先が…」

「構わぬ！おぬし、妾を誰と心得る！？」

「我はこの国が主！刹那〃S〃セネトレイアであるぞ！」

何という物言い。無理も道理も彼女の前には通用しない。

どんな我が儘も…彼女には叶える権利があるとでもいうのか。

競売を無効にし、私をお買い上げしてしまったのは…私の敵である、セネトレイア女王その人であった。

「あんたが…女王…？」

まるで鏡のようだった。それでも…同じなのは顔だけだ。

私にはあんな見る者を惑わす妖しさはない。胸もない。金もない。無いものだらけだ。

それでも彼女になく、私にあるものが一つだけ在る。それは、この胸の中に宿った、怒りと憎しみの…炎。

そんな私の心を知って知らずか彼女は微笑む。

それは、愛らしさの中にも色香を感じさせる蠱惑的な笑みだったが…そんなものを敵に向けられても虫ずが走るだけだった。

そして彼女は言い放つ。

「喜べ下賤の民、今より御主は妾が愛人ぞ」

「はあ！？」

（ちょっと待て！この人は一体何を言っ居るんだ！？）

老人や中年男に買われることは覚悟していたが、まさか女王に愛人発言されるような展開は予想していなかった。というよりあり得ない。

「我を拒む者には、死を…」

（あ、…ま…まさか……）

強く生きようとし、男の口調が移った私は…もしかして、店主に男と勘違いされたんじゃないか。

それならさつき私を落札しようとしていた男達は一体何だったんだろうと考え出した私の思考は女王の声で停止した。

「それが嫌なら我を愛し、我に仕えよ」

細い首筋に突き付けられた剣。

ひやりとした感触に、背筋が震える。

気に障るようなことを何か言おうものなら、殺される。

そんな冷たい女王の目。なんと答えればいいのかわからない。

それでも、こいつは…あの狂王に村を焼かせた張本人。

ここは真実を探るためには…氣に入らなければならないだろう。

“はい”と一言言えればいい。

言わなければ。

それなのに、私の口は…その言葉を紡げない。

目の前の赤い瞳が、村を焼いた炎を思い出させるのだ。

(こいつが…父さんを、母さんを…兄貴を…弟たちを…)

真実を知れぬまま、死を覚悟した私。

そんな私を見、視線の先で女王が笑う。

「…面白い。氣に入ったぞ！其方を我の第一愛猫にしてやろう！」

女王の言葉に憎しみが一瞬…何処かへ消えてしまうような気がした。おそらく呆然として。

*

どんな服を仕立てさせよう。とりあえずは城にある予備の騎士服でいいだろうか。

「ふむ…飼うからには名がいるな」

「……“那由多”。今日から其方は那由多じゃ！」

聞き慣れない言葉に僅かに首を傾げた猫。

「光栄に思うが良い、古来より…名に漢字を持つことは、タロツク王族に連なる高貴な血縁にのみ許されたことなのだから」

「お主、歳はいくつじゃ」

「…十四」

「口がなっておらぬな…躰が必要よのう、“十四”にございます、姫様”ぐらい言ってみよ。姫の前に我を褒め称え形容する言葉がついても構わぬぞ？」

「……十四にございます……………」

「聞こえぬぞ？」

「夫殺しの血の女王！」

剣を突き付けたのは今度は猫の方だった。

＊

「ほう…貴様、何故それを知る？」

「ステイブロードという村を知っているか？」

もし忘れたと言ったなら、これは私をすぐに殺していただろう。
けれど私が「はて？」といいながら「最近耳にした気がするのう」と言葉を続ければ、私に罪を突きつけるために猫は大声でまくし立てる。

「奴隷商ペンタクル…セネトレアの王ディスクがタロックの狂王と共謀し、滅ぼした村だ。ディスクは、自分の妻…つまりあんたがあの狂王を手玉にとったと言っていた！つまり…俺の故郷を滅ぼしたのは、あんたなんだろう！？」

「ふむ…妾の策の中、よくぞ生き残ったものよ。天晴れじゃ」

「……え」

猫の身体から力が抜ける。

それが隠し持っていた短刀は、力の抜けた手から落ち…床に冷たい音を響かせた。

寝台に倒れ込んだ猫の目には、透明な雫と“何故”という疑問が浮かんでいた。

「美丈夫の涙か…余計にそそると言っものよ」

「知らなかったか？我は元、タロツクが刹那姫。そしてタロツクとはすなわち毒と謀略の国。この部屋の香は、痺れと媚薬の作用のある一級品よ。何も知らぬ童子は時に暴れることもあるのでな、念には念を」

「さあ、夜はまだ明けぬ…楽しもうではないか。安心するがよいまだ殺さぬ…妾に齒向かった罪、夜が明けるまでたつぷりと償わせてやろうぞ」

恐怖に怯える猫の様に、伸ばしかけた手が一瞬止まる。
思い出したのは、思い出したくもない記憶。

（これが、妾に似ているからか？）

しかし、どんなに似ていてもその表情と記憶の中の像は合わせ
りはない。

（そうじゃ…妾は、涙など流したことはない）

細い首筋に触れてやると猫が僅かに仰け反った。私に触れられる
のが余程嫌らしい。

それもそのはずか。己の故郷を焼いた敵に好き好んで弄ばれる者
などいない、か。しかしそんな敵に弄ばれ、知りたくもない快樂に
溺れさせられた時…苦痛に歪むであろうその表情を思い浮かべ、私
の鼓動は早まるのだった。

しかし私は…それに触れた瞬間、違和感を感じる。

「…む？」

この年代の頃はそこまで逞しい胸板ではないかもしれないが、少
年の胸板はここまで柔らかくはなかったはずだ。

「だ、誰が……男、だって、言……った」

悔しそくに顔を赤らめながら、それでもざまあみやがれとでも言いたげに、猫は不貞不貞しく笑って見せた。

私はとんでもない思い間違いをしていた。

顔も背丈も同じ。それなのに、胸がない。だからこれは少年だとばかり。

弟をこれに重ね合わせてみていたせいで、これが男だと思いこみ、女だということに気付こうともしなかった。

「本当に、御主は面白い！よくぞここまで我の予想を裏切った！！」

「しかし世にはこれほど胸のない女もいたものか……」

「……“あんたこそ何を喰ったらそんな胸になるのかよ？”か？何故バレたか？決まっておろう、妾の頭脳を持つてすればその程度のこと朝食前じゃ」

まだ痺れているのだろう。ろくに言葉も喋れない猫は、恨めしそくに私を睨め付けていた。

ああ、愉快愉快。この悔しげな目が堪らない。

「そんなに私を殺したいか？」

「当たり前、前…だ！」

「妾を楽しませてくれた礼だ。一日に一度まで…妾に剣を向けても構わぬぞ」

私の寛大な言葉に、猫は目を丸くする。

「もつとも妾とて簡単には殺されてはやらん。それでもよければ近寄れ。もつと妾を楽しませてみよ…そして妾を其方に惚れさせてみるが良い」

「もし…そんな瞬間が訪れるなら、妾は抵抗せずに大人しく死んでやろう」

「ただし、もし妾を飽きさせたなら…其方を殺してやろう、其方の村なんぞ比べものにならないような…考え得る最高の殺し方でな」

「せいぜい頑張るが良い…妾の可愛い可愛い、子猫」

*

「アニエス、其方にこれの世話は任せたぞ」

部屋の戸が勝手に外から開けられる。だってこちら側にはそれを拒む鍵がないから。

私から生まれ持った身分を剥奪し、メイドのような仕事をさせるこの女王。そんな言葉で私の部屋に一人の少年を押しつける横暴者。悲しいけれどこの女が今、セネトレアでもっとも強い権力者。私なんか敵うわけがない。だから私はこういうより他にない。
……出来ることなら殺してしまいたいけれど。

「……………承りました、刹那様」

部屋に投げ込まれたその少年は、目の前の憎い女王と同じ顔。目の色も髪の色もまるきり同じ……

「……………ご兄弟ですか？」

「くくく、面白いであろう？他人のそら似もここまでくれば愉快なものじゃ」

女王が笑う。珍しく今日は機嫌が良いみたい。

（他人のそら似？）

ああ、良く見比べれば女王の方が瞳の赤が濃い。この子は平民としては深い部類の赤だけど、王族のそれには敵わない。

その目……この少年の瞳に宿るのは強い意志。目の前の女を殺してやろうと臆面もなく晒している愚かな目。

(……同じなのに、同じじゃないのね)

それがなんとなく、意外だった。この女に堕ちない男など居ない。清廉潔白だった私の弟だって今はもう……この女の虜なのだ。この子の目は……私の心を映しだしているみたい。表と裏、内と外で正反対。それでも同じことを考えている。そんな気がした。

「そうだアニエス、いくら弟の姉離れが寂しいからといって、私の猫には手を出すなよ？」

「ふふふ、嫌ですわ刹那様。そんな恐れ多いことどうして私が？」

「これは其方と同じで妾の首を刈りたいと思っておるのだ。言わばこの王宮で唯一の其方の味方になるやも知れぬ。情を愛などと履き違えている御主ならそう言うこともあるだろうかと思つてのう」

私がそれに何か反論する前に、床に転がっていた少年が女王に向かってこう叫ぶ。

「……痺れてるから人が大人しく黙つて聞いてれば、さつきから何なんだよあんた！俺があんたの愛玩動物！？一日一回なら殺して良い！？わけがわからないっ！何考えてるんだ！大体俺は女だって何回言えばわかるんだ！」

「口だけはもう回復したか。流石はタロツクの民よのう……毒の耐性でも受け継いでおったか」

それを確認した女王は、愉快そうに微笑むが、それは何か残忍な企みでも思い浮かべているようにしか私には見えない。

「ステイブロットは確か狩猟と農業、それから傭兵業で生計を立てている村だろう？傭兵を行うには毒の耐性は必要だ。何も戦うためだけではない、異国へ赴くまでの道のりで病に倒れぬよう免疫を付ける必要もある。故に御主は親、そのまた親……傭兵を始めた辺りの先祖から少しずつ毒を受け継いでいたのだ」

「それが何だよ？」

「つまり多少なりとも毒の耐性がある其方には、妾は遠慮なしに秘蔵の毒コレクションを存分に使って遊べるというわけじゃ。そう簡単には死ななそうだし……まあ死んだら死んだで其方の運がなかったということ」

幼子のようなこの傲慢さ。それが許されてしまう彼女。ああ、本当に憎らしい。

「頭を使え、猫。無い頭はこのアニエスでも使って考えろ。これは行動力こそ無いが、ユリウスの姉だけあって頭はそう悪くない。一人ずつでは到底敵わぬ妾の首も、二人ならば落とせるかも知れぬ」

突然彼女の話には私の名前が加わった。流石に傍観しているわけに

もいかず、私は女王に問い掛ける。貴女は私に一体何をさせたいのかと。

「刹那様、貴女は何をお考えなのですか？」

「別に何も。妾は唯……この憂さを晴らしたいだけじゃ」

そんな理由で……私を殺す理由が欲しいの？理由なんかなくてもそれが出来るくせに。そうしないのは、私が少しはその憂さを晴らしになってしまっているからだろう。悔しい。そんなことなら死んでしまいたい。今すぐ舌をかみ切って……

(……できるはずないわ)

だって、死ぬのは怖い。恐ろしいから。

毎日毎日目の前で人が殺されていくのを見せられた私は、死への恐怖を植え付けられた。この女に。

だから私は何も出来ない。女中のような雑用仕事に耐え、この狭い部屋で死に脅えて震えていることしか出来ないのだ。

「そんな、理由で……俺の村を滅ぼしたのかっ!？」

狭い部屋の中に響く声。強い怒気を孕んだその声は、真っ直ぐに女王のもとへと向けられる。

その肩は震えている。でもそれは恐れではない……怒りと、憎し

みから。私とは、違う。

何も言えないまま二人を見つめる私。女王は小さな溜息の後、物憂げに小さくその子へ微笑んだ。

「それは是であり非でもある。しかし可でなく不可でもない。其方にも脳はあるのだろう、少しは己の頭で考えるが良い」

そう言つて閉じられる扉。外側から鍵がかけられるのはいつものこと。この少年……いや、少女は女王が去った扉をしばらく睨み付けていた。それから半刻程すぎたとき、動けるようになったのだらう。何かを思い立ったかのように扉の前に立ち、その扉を思い切り殴りつけ、蹴り付け脱走を試みだした。

頭が痛い。この子は策なんて練れるようには思えない。正面突破で破れるほど、女王も扉も弱くない。第一これは、鋼鉄の扉。少し考えれば……考えなくても破れないことくらいわかるだろうに。

確かにこの子は行動力はある……ありすぎる。何度もハラハラとした。殺されるんじゃないかって。

放っておけばいつまでもこの子はそうし続けるだろう。この騒音と一晩中戦うのは私にはきつと無理。

「私はアニエスと申します。あの……私でよろしければ話を聞かせて頂けませんか？」

そう言つて優しく微笑みかけたのは、他ならぬ自分のためだった。

刹那と那由多^{テイルト}の出会い、テイルト視点。

真相編は時々壱と零の神様の視点が入ります。彼らの行う盤上のゲーム。カードはそれぞれ彼らの手駒。人の意志をためすために、困難を与え彼らの導く答えを見守ります。しかし不幸になる側からすれば、冗談じゃない話です。

壱は零に人の希望を見せるため、人を困難に陥れ……成長を促す。零は壱に人の絶望を教えるため、人を不幸に導いて……諦めを諭す。

人を試しているくせに、相手に完膚無きまでに叩きのめし敗北させたい。ゲームの勝利のためにそれぞれ自分たちで手を加えているせいで人の答えにも影響が出ていることを、彼らはたぶん、知りませんし気付こうともしません。彼らは力を持つがため、非常に傲慢な神様ですから。

4 M e n d a c e m m e m o r e m e s s e o p p o r t e t

「残念だったなあ、猫？」

「くそっ……」

この部屋の鍵を開けるのはあいつの手の者。それまであいつはいくらでも準備が出来る。卑怯だ。ここから出られない以上私は後手に回ってしまう。フェアじゃない。元々この場所はこの女のテリトリ。私はこの女に踊らされているだけじゃないか。

「ぶっ、ははははははは……何だ何だその格好は？」

胸の中で悪態を付くのは、恥ずかしさからの現実逃避。それさえこの女は許さない。

「この三日間は朝一番、寝込みを襲った正面突破。正々堂々なのか卑怯なのかわからんなあ、くくく。昨日は襲撃が無く、せつかくの仕掛けが台無しになり、今朝は仕掛けを施し二度寝をしても其方が現れん。いささか退屈しておったのだが……まさかメイドに扮して現れようとは、御主復讐のためなら恥も捨てたか？」

鍵が開いてすぐ、女王の元へと駆けていき……その十分後には毒にやられて強制送還させられる私。それが三度続いた時、同室のアニエスという女中は大きな溜息を吐いていた。

「いい加減、私のことを信用してくれませんか？私は何度同じ光景を見なければならぬのやら」

彼女は女王を憎んでいるようだが、それでも彼女は女王の部下。

何処まで信用して良いものかわからなかった。私も毎日同じ床の色を眺めるのはもの悲しいものがあつた。だから渋々それを受け入れた。

彼女から授けられた策。それは私と彼女が入れ替わり、メイドに扮した私が女王へ運ぶお茶へ猛毒をたらふく仕込み、毒殺するといふもの。

昨日一日彼女から仕込まれた即席の礼儀作法。この恥ずかしいひらひらした格好も、復讐のためと耐えたのに。

「……何でわかつたんだ」

「愚かな猫よ。妾の記憶力を舐めて居るのか？」

女王は赤い口の端を歪めて私を嘲笑う。

「歩き方一つ、声一つ……それは多くの情報をもたらす。一度聞いた其方の声、足音……妾が忘れたと思うか？猫よ。妾は其方の重さまで正確に言

い当てられるぞ？言つてやろうか？そうだな御主は出るところも出ていない癖にアニエスより大分重いな。数値で言つと……」

*

その日のテイルトは私の部屋に、泣きそうな顔で帰ってきた。同じ顔の女が絶対に浮かべないようなその顔に、私は思わず吹き出した。

「アニエスっ！駄目だったじゃないか！絶対大丈夫だって言つてた

のに、五秒でバレたっ！」

「あら、いいんですよそれで」

「よくないっ！あの後俺がどうなったかわかるかっ！？」

「どうなされたのかしら？」

「……………俺の個人情報暴露された上につ！あの格好のまま公務に同行させられたんだ！“女中ですか？”と聞かれる度にあいつは“街で拾った男娼じゃ”なんて言いやがって。おかげでこの城じゃ俺はあいつの愛人扱いだっ！女装好きの変態なんて尾ひれまで付けられたんだっ……………もう嫌だよ、どうして私がっ……………ううっ、殺すならいつそのことひと思いに殺せっ！」

「あら、まあ」

実にあの女のやりそうなことだ。おそらくこの少女の悔しそうな顔が見たいがための嫌がらせ。あの女に気に入られたところでこれだ……………顔が同じせいでこの少女まで憎たらしいと思っていた私だが、豪快に男泣きを始めた少女が流石に哀れに思えてきたので、にこりと優しく笑みかける。

「私では役不足かもしれませんが、愚痴でも相談でも乗りますから……………元気を出してくださいティルトさん。私もあの女に復讐したいと思っている、いわば貴女の同志。私は貴女の味方です」

「あ、アニエスっ……………」

「お辛いでしょう、お可哀想に……………もっと話してください、私でよければ」

そう言うだけで、少女の頑なだった心が開かれていくようだった。なんて単純な。

まあ、辛い思いをしたときに優しくされれば誰でも警戒は薄れるだろうが、こんなに上手くいくとは思わなかった。私の従順な手駒になるのもそう遠い日のことではなさそうだ。

しかしそうしたところで役に立つのだろうか。こんな無細胞な脳みその少女の牙が、あの女王まで届くとは到底思えない。

（まあ、そこは私の調教の腕の見せ所……なんでしょうか）

「ちょっと自分が出るとこ出て引っ込んでるとこ引っ込んでるからって調子にのりやがって！私のこと、洗濯板とかまな板とかからかうんだ！あんなに胸に肉付してる癖にどうして私より痩せてるんだよ！納得いかないっ！絶対あいつ筋肉ないに決まってる！箸より重いものは持ったことがないに違いないっ！これだから金持ちは大嫌いなんだ！あいつらがぐうたらしてる間、私たち農民がどれだけ苦労しているかも知らないでっ」

私の企みに気付かない少女は涙を拭いながら、次々に女王の愚痴を言い始める。余程鬱憤が貯まっていたらしい。

「あの女のせいで城の男達からは嫉妬で殺されそうな視線で見られるしっ！」

それだけじゃないだろうが、言わないであげた方がまだ幸せに違いないと、忠告をする気もない私の耳に……何かが聞こえた。リインと軽やかな音。テイルトが怒りで肩をふるわせる度、それは私の部屋に響いて……見ればテイルトの首には何かが付けられている。

「あら、それは……？」

「引っ張つてもひっつかいても切れない……中に鉄が入ってるみたいで重い」

奇襲の牽制だろうか。これなら確かにすぐわかる。しかし一度聞

いた足音で人を判別出来るなんて化け物級の記憶力を持っているという彼女なら、そんなもの必要ないはず。

「まあ、十中八九嫌がらせでしょうね」

この首輪は所有者の証といったところか。村を滅ぼした元凶に付けられた分かり易い所有と隷属の証。この少女にとってこれほど屈辱的なこともないだろう。

「あの女……殺してやるっ！」

「殺して良いのは一日一回でしょう？約束を破るとどうなるか知りませんよ？」

今にも部屋を飛び出していきそうな少女を諫め、私は小さく嘆息をした。

「そんなことより明日の計画を立てましょう？」

「アニエス、こんなのであの女を殺せるの？今日だってバレたのに……」

「だって、殺す必要なんかじゃないですか」

悔しげに爪を噛む少女を私はなだめるように微笑んだ。その自然さに彼女はすっかり流されかける。

「……ああ、それもそうか。………って何を言ってるんだアニエス！？」

私は笑顔を崩さず、事実を淡々と語ってあげることにした。

「要するに、貴女があ女王の心を射止めればよろしいのでしょうか」

？本日の女王の機嫌はなかなかよろしかったそうで、首を切られた人間も居なかったんですよ。私もお褒めに預かり今日一日は雑用から解放されましたし、全体的に上手くいったみたいじゃないですか」

しかし、昨日私にそれを教えてくれた本人の頭の中には、その選択肢がなかったよう。私の言葉に彼女は大きな瞳を見開いて絶句した。

「なんでそんな話に……」

ようやく彼女が絞り出した声は、驚きを通り越し……半ば呆れを含んだものだった。

それは処刑なんてない方がいいに決まっているけど。それでも納得できない。そんな表情で少女がふて腐れている。

「貴女が昨日話してくれたことですよ。貴女が女王を本気にさせれば、彼女は殺されてくれるんでしょう？」

「薄気味悪いっ！大体あんな女が約束を守るはずがないっ！」

私の言葉に、少女は怒りも顕わに吐き捨てる。

もちろん女王の言葉は戯れだろう。唯の暇つぶし。異性愛者の彼女が進んで道を踏み外そうとするはずもない。

単にこの少女の反応が面白いから。からかうためにそんなことを言い出したのだろう。それでも私は、それを見逃さない。つけ込んであげる。それであの女王を討てるなら。

「……それが策ならそうですね。けれど彼女は嘘を何より嫌っています」

でも、これは事実。私はこの半年の間で得た彼女のことをそつと

少女に教えてあげた。

「自分を偽ることも、他人に偽られることも、彼女は憎んでいる。彼女がこれまで殺めてきた者の多くは、彼女に嘘を吐いた人間。だからあの女王はきつと約束を守るわ、絶対に」

傲慢な女王は嘘を吐く。それが彼女の中で策だったなら。

けれど傲慢な女王は自他に誠実な真実を求める。戯れは策ではない。だからもしそんなことが起これば……彼女は約束を違えない。なぜなら自分の勝ちを確信しているから。その傲慢さが、命取りになるとも知らずに。

「嫌だ！絶対に嫌だっ！あんな女口説くくらいなら処刑された方がマシだっ！」

少女が情けない顔で喚き出す。強がっているが所詮は根性なしの女。唯の村娘か。それでもこれは私の手駒。こんなところで諦められては私が困る。

「テイルトさん……貴女は何をしにここへ来たのですか？復讐ですか？それとも殺されにきたのですか？」

私は彼女を見つめ、叱咤する。

「私は女王を口説けなんて貴女に言いません。望みません。そんなことをしなくとも、あの女を陥落させる良い考えがあります」

あの女王の求めているもの。半年間彼女を近くで見ってきた私はそれを理解している。私はその役割をこの少女に与えれば良いだけ。

「彼女は貴女の貴女らしさを気に入ったのですから、下手に貴女が彼女をどうしようとしたところでそれは逆効果。貴女は彼女を敵だと憎み、常に恨み罵ればいいのです。貴女がそう思うのならば」

目を瞬かせるティルト。彼女は話の半分も理解できていないようだ。小さな嘆息の後、私はこの少女でも理解できるよう、もう一度分かり易く言い直す。

「つまり貴女の偽りない素直な心のままに彼女を憎めばいいということです」

「何だ、そんなことなら」

簡単じゃないかと彼女は安堵の溜息。それが難しいことだと彼女はまだ知らない、なんとも愚かな。だから私は忠告する。警告する。彼女を侮るなど。

「いつまでも彼女への怒りを忘れないで。決して風化させないで。絆されることがないように、お気をつけください」

私は見てきた。彼女を落とすつもりが落とされて……奈落の底まで落とされた愚か者の葬列を。彼女にはそうなって欲しくはない。それでは私が困るから。

「貴女は彼女のどんな素顔を見せられようと、彼女を人間だと認識してはならないのです」

強く憎めば憎むほど、その存在は心を占める。愛でも友でも劣でもいけない。情が生まれたら最後、……誰も彼女の視界には残れない。

＊

アニエスと名乗った女の人は、私より少し年上？でもあの女よりは下だろう。それでも落ち着いている彼女はどこか大人びて見えた。敗北して帰ってくる私を出迎える優しい微笑みは、とても綺麗だった。あの女も綺麗は綺麗だけど、この人の綺麗さは良い意味での人間的魅力を醸し出している。あの女のような邪悪な笑い方とは違う、人の心を和らげる、穏やかで優しい笑み。

私が彼女を信用するに値すると判断したのは昨日のこと。女王の召使いだっただけだが、今は女王のペットである私の世話を命じられているらしく、部屋に帰ればいつも彼女はそこにいる。

村のことを話してしまったのは、彼女が聞き役として優れていたこともあるが……連日の敗戦、女王にかけられた毒薬に心身共に疲れ果てていたのだろう。弱っていた……本当は誰でも良かったのかも知れない。この辛さを吐き出したかった。

話し終わると彼女はうつすらと黒い瞳に涙を浮かべていた。綺麗な色だ。なんとなく好きな色だと思った。私の赤はあの女を、そして狂王を思い出させるけれど、彼女の黒は何だか安らぐ。兄さんと母さんと同じ色だからだろうか。

「そうですか……故郷を、お可哀想に」
「……………哀れまれないわけじゃない」

彼女の優しい言葉も素直に受け取れなかった疑心暗鬼の私にも、彼女は根気よく何度も笑顔を見せてくれた。

「いいえ、私にもわかります。私も居場所を奪われた者ですから」

そういえばあの女は言っていた。このアニエスという人も、あの女の首を刳ってしまいたいと思っているのだと。

「あんたもあいつが憎いのか？」

「そんな畏れ多いこと、とても口には出せません……………が、あの窓の外を星が流れる度……………うっかりあの女が死んでしまわないかと願ってしまっておりすけれど」

優しく微笑みながらの彼女の言葉。顔に合わないその発言に、思わず私も笑ってしまった。そんな私を見守りながら、彼女は小さく息を吸い……………静かな声で語り始める。

「ご存じないですか？セネトレア王には後宮があり、彼には多くの妻と子供がいたんです」

知るはずもない。私はステイブロットから出たこともなければ、あそこには他国のことを学べるような機関はなかった。稲の植え方や、収穫の時期。この足跡は何の動物かだとか……………この草は食べられるとかこれは毒があるとか。そんな実学しか教えられてこなかったのだ。

アニエスはそれには突っ込まずに話を進める。おそらく事情を察してくれたのだろう。

「けれど彼はその全てを捨てたのです。一つの恋の代償は高く付き

ました。支払ったのは彼は命だけ。それでも子供達は王位継承権を奪われ、王族から普通の民へと身分を落としたのです」

「……最低だ、あいつ」

アニエスは私の言葉に、何とも言えない笑顔を浮かべる。彼女は苦笑しているようだった。

「すみません……悲しいことに、あんな好色男でも私の父上だった
りするので……死人を悪くは言いたくありませんね」

「ち、父上！？あいつがっ！？」

「ですが、父が貴女の村を滅ぼしたのは事実。詫びても何も戻りません……父の行いを代わりに謝らせてください」

開いた口がふさがらない私にアニエスが謝罪の言葉を口にする。
そう言えばあの男も黒い目をしていた……でももつと濁った目だった。アニエスは違う。静の中に宿る強い意志を感じる……氷の檻で覆われた炎のようなその瞳。彼女が女王を憎んでいるのは、本当だ。

「お姫様………？」

「アニエス^{アレフ}「A」セネトレイア。今でこそメイドのような事をさせられていますが、一応私はセネトレアの姫でしたよ？」

私の言葉に彼女が返すのは、悪戯を成功させた子供のような笑顔ね、騙された？そんな風に問いかける顔だ。けれど次の言葉を紡ぐことには、彼女の顔はすぐにもとの真剣な顔つきに戻されていた。

「私も貴女と同じくなにやら彼女のお気に召したようで……命と身分は奪われずにすんだのですが………これはこれで屈辱的です」

狭い部屋。ドレスの代わりに召使いの服。公務の代わりに雑用。それでも身分は姫のまま。家だったはずの城を歩けば嘗ての家臣から命令をさせられる。メイド達からの陰口にもこの半年で慣れてきた。そう言っ、彼女は目を伏せ呟いた。

「女中姫……それがこの城での私の呼び名です」

彼女の言葉に私は何を言うべきか迷った。私と彼女は立場が違う。抱える悲しみも違う。だから可哀想なんて言ってもさっきの私のように、彼女もそれを受け取らないだろう。

それでも私たちは、同じ憎しみの炎をこの胸に宿しているのだ。だから私は彼女を励ましたかった。それでも言葉が見つからない。

「アニエス……」

口からこぼれた言葉。その名前に彼女は顔を上げ、私を見つめる。彼女は驚いているようだった。

「私の名前、覚えてくださっただけですか？」

少しだけ嬉しそうに、彼女が笑う。

「嫌味でなく誰かにそう呼んでもらえるのは……半年ぶりです。ありがとうティルトさん」

昨日はあんなに儚げな笑みを見せていた彼女だったのに、私は彼女に隠れてこっそり溜息。彼女は切り替えが早過ぎる。

人畜無害な笑顔で彼女は妙な策ばかり練ってくる。何度目かの却下の後、今度は彼女がそっと溜息。私なんかと違って、それさえ絵

になる辺りやっぱり美人だと思う。

「やはり私が思うに、朝になるまでここから自由に出られないティルトさんはその時点で不利、後れを取ってしまうのです」

「それは私も思ってた」

頷いてそれを肯定すると、がしっと両手を掴まれる。視線の先には彼女の満面の笑み。

「それなら話は早いです。ティルトさん、脱出しましょう！」

5 Date et dabitur vobis .

確かに彼女の言うことはもつともだ。私だって、納得したさ。それでもこれは、いったい何なんだろう。

「扉が駄目なら壁をぶち破る。それが駄目なら窓から降りる。幸い壁は鉄製ではありませんし窓には鉄格子もありません」

「壁は私が引き受けましょう。実は半年前から少しずつ掘っていったんです。もうしばらくすれば隣の部屋と下の階への抜け道が完成します」

大人しそうなお姫様に見えたけれど、意外と彼女は大胆だ。昨日までのイメージだったら……窓枠を見つめたまま儚げに紅茶でも啜っているような姿しか想像できなかったのに。

「それではティルトさん、任せました」

そう言って差し出されたのはシートとカーテン。

「これをちぎって結んで繋げて地上まで降りてください」

「……え」

彼女は何を言っているんだろう。窓の外を覗いてみると、かなりの高さ。どうやらここは城の尖塔の一つの最上階らしい。

どのくらいの細さで千切れれば下まで辿り着けるのか、頭が痛い。

「下まで行かなくても良いんですよ。螺旋階段の何処か適当な場

所、その窓でも叩き割るか、あそこ……見えますか？」

アニエスは窓の外……先の二、三十メートル下を指さした。

「尖塔なんて言っても他の塔と繋がってます。あの屋上ならこの太さで千切つても余裕で届くと思います。あそこからだと全塔に繋がってますし、女王の寝室にも行けるはず」

「そこまで解ってるならどうして今までやらなかったんだ？」

「私は頭でつかちで運動神経最悪なんです。これやったら足滑らせるか手が耐えられないかで死ねる自信があります」

確かにアニエスがこの方法で脱走する姿を上手く想像できない。

「ですがここは私の庭。半年足らずの支配者より、ここで生まれ育った私に地の利があります」

そう言つてアニエスが手渡すは城の地図。近道や抜け道、空き部屋や隠れ易い場所などが事細かに書いてある。

「覚えました？ 飲み込みが早くて助かります」

流石にこれを持ち歩くことは出来ないようだ。これを借りて落とし女王に見つかれば、アニエスが危ない。アニエスのためにも私は必死に地図を頭にたたき込む。

外出たときにちゃんと周りを見てればアニエスに迷惑をかけることもなかったのに。馬鹿な私は女王を殺すことばかり考えていて、それ以外何も見えていなかった。

「迷惑ばかりでごめん……私なんか元が空っぱだから詰め込みやすいだけだよ、きつと」

自嘲気味に笑う私にアニエスはそんなことないですよと優しく微笑む。他人に褒められ慣れていないせいで、顔が赤くなるのを自覚する。誤魔化すように私は気になっていたことを聞いてみた。

「と、ところでさ！……これ、いつやるんだ？朝じゃ意味ないし昼じゃ目立つし………やっぱり夜？」

「ええ、勿論です。あの女は挑戦権を一日一回と言いましたね？一日とは午前0時でリセットされます。つまり朝まで待たずとも挑戦権は夜の内に復活するのです！」

アニエスが顔を近づけにこりと笑う。

「私の言いたいことがわかりますね？」

「……“四の五の言わずに寝込みを襲って首刈って来い”？」
「正解です」

良くできましたと言わんばかりの満面の笑みで、私の頭を撫でてくるアニエス。これでは猫というか犬扱いだ。それでもちよつと嬉しいような気がするのはいやほいや私が褒められなれていないせい。

縄は完成してきたが、私は肝心なことを忘れていた。窓の外は薄暗い。星も出ているしもう夜だと言うことはわかるが……

「アニエス、時間とか知ってる？」

見回したところで狭い室内には時計も置かれていなかった。時間が解らないのは致命的。

あの女のことだ。もし一分でも一秒でも早く仕掛けたら文句を言ってくるに違いない。下手をすれば殺される。

（殺される……）

頭の中でその言葉が繰り返される。あの炎がまぶたの裏に焼き付いて……悲鳴が耳から離れない。殺してやりたい。それでも……私は死が恐ろしい。

今は遊ばれているだけ。でも私もいつか、同じように殺されるのだろうか。彼女はそう言っていた……飽きたら、殺すと。

「アニエス……」

震えだした私の手。それをぎゅっと包む両手の温もり。

「私たちは一蓮托生。私に貴女を預けた時点で私は貴女と共に殺される運命なんです」

彼女の手、彼女の声。それが私を安堵させる、不思議な感覚。

「ですから貴女が失敗しても私は恨みません。貴女がここにいるのも半分以上は父のせい……その償いの時が来たのだと思うことにします」

辛そうな顔で微笑むアニエス。けれど彼女は、私が何か言うより先に笑う、もう一度。

今度の笑みは始めて見るような、不敵な笑み。私を勇気づけるように、彼女が笑う。

「でも私は死ぬつもりはありません。共に生きましょう、ティル

トさん」

「アニエス……うん！生きよう、一緒に！こんな所で死んで堪るか！」

御守りです。そう言って彼女が首から下げた鎖を外す。

「これを私の代わりに持って行ってください。私はいつでも貴女と共に……」

彼女から手渡されたのは小さな懐中時計。金製でも銀製でもない、宝石の一つも付いていないシンプルなデザインのそれはお姫様の持ち物には思えないが、蓋に刻まれた紋章が綺麗だった。蓋の裏には何やら文字が刻んであるが、無学な私には理解できない。

「それ、……形見なんです」

誰の、とは言わなかったし……私も聞けなかった。けれどこれが彼女にとって大事なもののだろうということはわかった。それを私に預けてくれたということは、彼女が私を信頼してくれているから？

「アニエス……これ、持ってくれ」

代わりに私が彼女に差し出したのは、兄の毒刀。形見だなんて信じない。それでも今の私が持っている中で一番大事なものだ。だから彼女に持っていて欲しかった。私も彼女を信じているから。

「でもティルトさん、コレがなければどうやって？」

「コレを持って降りるのは危ないし……他にも一応武器ならあるんだ」

今朝のように刀の中から取りだした毒を使うのではない。食器のナイフを使うわけでもない。

私の手の中に残された小瓶。透明に見えるその中身はうつすら赤に染められた不思議な色。そこから甘い香りが漂うようだ。暗殺請負組織SUITの人から貰った、毒薬だ。

「一時的に気を失う毒だつて聞いた。気絶さえしてくれればどうにでもなる……それに眠っているなら同じ事。使わなくても殺せるかもしれない」

相手が無抵抗なら、首でも絞めて殺しても良い。仇がじわじわとこの手で息絶えていく……それを味わえるもつとも良い方法。奴隷王の様にあつさり死なれては困る。復讐が終わった達成感があれではまるでない。

あの女の苦痛に歪み顔が見てみたい。助けを乞う眼差しが見たい。勿論助けてなどあげない。手もゆるめない。私をあの時殺さなかったこと、それを後悔しながら死んで逝け。

赤い毒液の瓶に映る私の瞳。それが一瞬誰かと重なった。

*

「あ、小猫だ」

「ん？ちよつど良いところにつ！」

なるべく下を見ないようにして、縄を少しずつ下っていく。

降りたところまでは良かった。山で暮らしてたんだ。私の運動神経は悪くない。上手い具合にアニエスの言った塔の屋上へと降りられた。

問題は上ばかり見てきた私が、下にいた人間に気付かなかったことだ。

そこにいたのは二人の騎士。確か市で私を買われた時に、護衛としてあの女と一緒にいた……とつさに逃げようとするが、左右の道を塞がれる。

「はあ？え……？ちよつと待つ……」

「夜伽相手が何でも気にくわなかったそうであの姫様ご立腹でなあ、俺たちこんな時間外労働で代わりの美男を捜しに行くところだったんだ」

「我が儘だよなああのお姫。早くても遅くても駄目で？顔は勿論声も良くて？性格がむつかないような美男？出来ればDT求む。ストライクゾーンはマイナス十歳からプラス十歳。その時々気分によつて中年や老人もオーケー。でも醜男は問答無用で却下」

「それでもうお前行けよつて話で互いに押しつけあってたんだが……こいつは根暗で陰険な性格と声」

「こいつは背の高さと平凡な顔が気に入らないんだつてさ」

互いに互いを指さし、背の高い男はカラカラと背の低い男はケラケラと笑い合う。

「ああ、あとこの下品な笑い声だったかお前は」

「君は下品で下世話な話しかない所は気に入られてるらしいよ？」

「というわけで頼んだぜ子猫ちゃん」

「人身御供確保、捕獲」

両腕をそれぞれに取られ私は問答無用で引き摺られていく。

「私が買われてきたとき、見てたんでしょ！？店主もあの女も間違えたみたいだけど、私は女だ！！」

思わず口調が素に戻ってしまった。安心するからかアニエスと話
 していても時々なるが、今回ののは驚愕のせい。

「あつはっはっは、冗談。こんな胸のない女がいるかつての、な
あイオス？」

「だよね、イアン」

「つてなわけで、飼い主のご機嫌とつてきてくれよ」

「そうそう、脱走したこと黙っててあげるから。僕らが連れてきたってことにして」

「嫌だつ！嫌だあつ！手、離せつてば！もう嫌だつて……だから違うんだよ、私は女なんだつてば！」

[illegible]

「洗濯板に失礼だよイアンってば、くくくくく」

もういつそのこと上でも下でも脱いで見せてやろうか。ほのかな殺意と共に私はそんなことを考える。女王の寝室に辿り着くまで続けられた二人の失礼な発言に、私はかなり追いつめられていた。

＊

「契約騎士、トライアンフ！」

「並びにトライオミノス惨状しましたー」

「馬鹿、参上だろ？」

「えーだって君と一緒に登場するとか僕的には惨状で正解っていうか」

「あつはつは、遠慮ねー面白れ〜！」

寢室の扉を開けるのは時間を無視した明るさの契約騎士トライアンフと、いつでも何処でも根暗皮肉屋契約騎士トライオミノス。普段の私にとっては面白い部下なのだが、機嫌が悪いときには苛つく部下でもある。そして今の私は……その後者。

「妾は今機嫌が悪い。其方達の漫才に付き合う気力なぞない。さつさと美男を連れて参れ」

「くつくつく、やっぱり僕ら普通にスルーされてる美男から」

「いーっていーって、そのおかげで俺等命も助かり給料もらえてるんだから。大体男つてのは本命にモテればそれでOKだろ？」

「そう言いながら君の本命すぐ変わるし。ナンパの時点で猥談ばかりだから全然モテないし」

「そんな包み隠さない正直者の俺をそのまま好きになっってくれる女こそ俺の本命だからさ！」

「世界の何処にも君の本命が居ないことがたつた今判明」

トライオミノスの遠慮なしのツッコミに私は思わず吹き出す。おつといかないかん……これでは威厳も品もあつたものではないな。

「くっ……………今のは少し愉快だったが、さっさと用件を言え！
見つけたのか？」

「もつちろん。俺等是有能な姫様の契約騎士っすから」

「“有能な姫様”の契約騎士……………姫様の“有能な契約騎士”……………
イアン言葉違う」

陽気な相方の言葉遣いについて何やらぶつぶつ言っているトライ
オミノス。それをさくつと無視しトライアンフは爽やかすぎて胡散
臭いレベルに爽やかに笑む。ここまで顔と中身が合っていない男も
なかかないない。私が男だったならこんな感じだったのかもしれない
と思い、また吹き出しそうになる。

「水くさいっすよ姫様？せつかく買った奴隷にまだ一度も夜伽
させてないらしいじゃないって話じゃないですかー」

「きつと初日の昼間襲って、がっかりしたんじゃない？早すぎた
とか」

「おいイオス、お前のがさり気なく下品だよな？発言さつきから」

「……………奴隷？」

みれば奴らの足下には何かが転がっている。あれは……………私の猫か？

「何なんだよこの男達は！俺の話全然聞かないっ！女だって言っ
ても信じない！」

「まあ、それは無理だろうな。胸は諦めるとしてせめてもう少し
おしとやかにしたらどうだ？言葉遣いを直すとか」

「なんで諦める前提なんだよ！俺だって……………ちゃんと栄養バラ
ンスのとれた飯を食ってればあんたみたいになってたんだからな！」

「知っているか、那由多……遺伝はどうにもならん」

「こ、こんな時だけ真面目な顔するな！名前で呼ぶな！大体なんで、母さんがまな板前提で話を進めるんだ！母さん子供10人も産んだんだぞ！？まな板のわけないじゃないか！」

「……子猫、君の父さん変態だったんだね。洗濯板相手に10人とか……うわぁ、真性の変態だよそれ」

「ああ、だからか子猫ちゃん。お前今日女装して城練り歩いてたんだろ？噂で聞いたぞ？」

うつうつ…とかあぐぐぐぐ…とかぐおおお…とかよくわからない奇声を発しながら床をのたうち回っている猫。泣いているのかも知れない。これしきのことか？

そう思うと口から笑いが漏れる。

何だか見ていてとても和む。とても馬鹿らしい風景だが、本人はそれに気付いていないのがまた可笑的い。

ああ、愉快愉快。

これまでの猫は従順すぎた。あれでは犬だ。
犬はもういらん。

懐かない猫。ああ、可愛いぞ。もっとからかってやりたくなる。
猫はやはりこうではなくては…

（もつとも、懐いたりすれば…即殺してやるがな）

懐かないからこそ、猫は愛らしいのだ。

ああ、可愛いな。

*

しばらく三人のまな板議論を聞いていたが、何かが頭の中でキレた。

私の大切な家族を、……死んだ人を侮辱されて黙ってなんか居られない！

「だから、俺は女だ！父さんは変態じゃないっ！母さんはまな板じゃないっ！くそっ、まだ信じてないんだろ！」

私の言葉に頷く騎士二人。

「そりゃあなあ……」

「そりゃあねえ」

「確かめた妾でも、未だに信じられないぞ？」

女王のこの一言で、完全に私の目は据わったことだろう。

「っ……わかった」

私は近くにいた方の騎士の片手を掴み取り、自分の胸を触らせる。

「これでわかったか？無能騎士！まだわかんねえか！？わかるまで触らせてやらあ！揉めばいいだろこんちくしょう！」

そこまで叫んだ私は……恥ずかしさより証明しきったぜ的な達成感、誇らしさが胸を占めていくのを感じていた。それと同時に「ここまでしなきゃ信じてもらえないのか」と自分の貧相さが悲しくなってきた。泣きたい。

「ん？」

目の前の騎士は無言だ。見れば白目を剥いている。どうやら気絶しているようだった。顔は真っ赤だし鼻から血が滴っている。

「あー……こいつ猥談スキーの癖に意外と純真だから、そーいうことするとこーなるよ」

「ほう……妾に靡かなかったのもそういうことか。年下、そしてこの童貞臭……顔は平凡だと思っていたがなかなか見所があるな」

なにやら感心した風ににやついている女王。そんな彼女を残し、トライオミノスは相方を引き摺って廊下へと消えていった。その扉の閉まる音が、私を正気に返らせた。

「何なんだよっ！もう……」

吹き抜ける夜風の中、頑張って部屋抜けてきたのに、殺しに来たのに、なんかそういう気力が萎えてきた。しかしこのまま流されてはいけない。アニエス、私に力を貸してくれ。

私は服の上から首にかけた時計をぎゅっと握りしめる。

「いい加減にしてくれ！俺はあんたのシエラザードになんかなる気はない！夜伽相手なら他を当たってくれ！」

「まあ、あながち間違いではないな……妾もこれまで多くの夜伽の相手は殺してきたからのう、今日の使えん男もそうじゃ。しかし……くくく……其方にそんな教養があったのか？」

教養なんか無い。それでも寝物語くらい母さんが話してくれた。祖母だつて暇なときに昔話をしてくれた。でも、それはもう絶対にならないのだ。

だって、この女がステイブロッドを焼き払ったから。

「お伽話くらい小さな村にだっていくらでもあるさ……あんたが滅ぼさなきゃ、いくらでもいつまでも語り継がれたはずの話が！」

睨み付けた先、ぶつかる視線。赤い瞳は愉快気に私を見ている。

「ならば申ししてみよ。妾が千日後まで飽きずにいるか、はたまた其方を愛するようになるか……試してみるのも悪くはない。さあ、近う寄れ……」

*

「……テイルト！」

翌朝扉から帰ってきた私をアニエスが出迎える。突然抱擁されたときは驚いたけれど、彼女が一睡もしないで待っていてくれたことを知り、申し訳ない気持ちになった。

「無事で良かった……心配しました」

「ごめんアニエス……」

事情を話すと彼女の顔が綻んだ。

「いいんですよテイルト……一日二回に増えたことは喜ばしいことではないですか」

「二回？」

「昼間は殺し、夜は物語……二度も女王に近づけます」

けれどそれは同時に相手にも、殺しの許可を認めること。私の話が面白くなかったら、飽きたら私とアニエスは殺される。

「良かったことと言えば……扉の鍵取ってもらえたんだ」

「え？」

「どうせ窓から抜け出してくるのなら鍵など意味がないだろう？……って」

「まあ……あの女、私の半年の苦労をよくもまあ無駄にしくさりやがりましたわね」

「あ、アニエス？」

「うふふ、何でもありませんよ、つい心の声がこぼれてしまっただけですから」

アニエスは笑顔なのになんだか怖かった。絶対心の中では笑っていない。指をバキバキ鳴らし始めた。お淑やかそうな顔と全く合っていない……すごく、怖い。現状を打開するために、私は話題を逸らそうと試みる。

「でも面白い話なんて……いつまで続けられるか」

「その時は私も力を貸します。頑張りましょう！」

そうやって微笑むのは優しい笑顔のアニエス。やっといつもの彼女に戻ってくれた。とりあえず一安心。

「それで、昨夜はどんなお話を？」

殺されなかったと言うことは、それなりにあの女王を満足させら

れたと言うことだろうと彼女が私に問い掛ける。

私はあの話の何処が女王の気に召したのか考えるためにも、もう一度同じ話を唇に語らせ、昨晚のことを思い出す。

＊

「俺の村には……自然がたくさんあったから、動物や精霊の話が多くあったんだ。自然の驚異や子供達を戒めるために作られた話とか……そう、よく悪魔の話を聞かせられた」

「悪魔？」

その言葉に、女王が反応した。

「タロツクの冬は辛い……ステイブロッドも冬は雪に閉ざされる。だから冬は悪魔だってあんたも聞いたことはあるだろ？ 仮にもタロツクのお姫様だったんだから」

私の言葉に女王は、ふて腐れたようにぷいっと横を向く。言葉の何かが彼女の気に障ったようだ。

「……………王都のデクストラニアは太陽の都。雪など降らん」

「じゃあ……冬の悪魔の話は聞いたことないか」

「冬を擬人化したものを、悪魔という存在として信じているのか？」

「ああ、年寄りの連中はみんなそう。冬の悪魔は眠りを司るから年寄りには好かれていたな……怪我や病気じゃなくて、眠るように老衰で死ねるのは幸せだって」

年寄りから狩っていく狂王の処刑。

苦しいのは嫌。痛いのは嫌。

冬の内に死にたい。わざと山に入り込み、凍死した老人も毎年何人かいた……

その老衰さえ許されず、焼き払われた村と多くの命。

皮肉なものだ。こんな話をその元凶に語って聞かせているなんて

「冬の悪魔は一年中雪の溶けない山……そこにある白の森に住んでいる。その悪魔が居るからその森は一年中雪が溶けないんだ」

「でも農民にとって冬は敵。毎年春祭りを行って、何とか冬の悪魔を追い出せないか……人々は考えた。その春祭りがどんなものだったか、あんたはわかる？」

「むう……わからぬ。さつさと答えよ！」

頭はとんでもなく良い癖に、自分で考えることが面倒くさいのか単に眠くなってきたのか。彼女は答えを要求する。

「……処刑」

予想外の答えだったのか、一瞬彼女の目が大きく開かれる。眠気も飛んでしまったよう。けれどその残酷性が彼女の関心を引いたらしく、次の瞬には赤い瞳がキラキラと輝きを増していた。さつさと続きを話せ、教える。そんな好奇心の塊。

唯の知りたがりの子供のようにだと苦笑しかけ、その瞳に一瞬弟達を思い出し……これがそれを殺めた元凶なのだと私は思い直した。

「悪魔の人形を作って、それを燃やしたり首を刎ねたり……それで春の訪れを祝うんだ。そんなことで春が来るわけがないのに……」

春は嫌いだ。桜が咲くから。処刑が来るから。

俯き黙り込む私を女王が急かす。小さく一度嘆息し、私は話の続きはじめる。

「悪魔は自分が誰にも必要とされていないことを悲しみながら毎年春祭りを見つめていた……そんなある時、悪魔は出会った。その子は一人の人間の少女。彼女は彼のために涙した。正確には、彼を象ったその悪魔の人形に」

「“この子は何も悪いことをしていないのに、どうして殺すの？”祭りの由縁も知らない子供にとって、その祭りは理解できない恐ろしいものだった」

そこで一息吐いた私に、女王が口を挟んで来た。

「ああ、そういうことはあるな。王都で行われる新年の祭りで現れる鬼には……町中の赤子が泣きわめくと聞いたことがある。もつとも妾は逆に鬼を泣かせてやったが」

「何やってんのあんた……」

それ以外になんと言えいいだろう。なにやってんの、この人。子供が大人を泣かせるとか……本当に、何をやったんだ？

「普通気付くであろう？いくら変装しようとも、足音は変わらぬ人間の犯行だと一目瞭然！」

「……夢のないガキだったんだ」

「妾はリアリストぞ？鬼も妖怪もいるはずないのだ、あんなもの

は愚民の脆弱な心が生み出した幻想じゃ」

誇らしげに胸を張る女王。そこで始めて気付いたが、彼女の寝間着……どうにかならないものだろうか。肩から足から胸からもの凄い露出度だ、見ていて寒い、何か着てくれ。

「寒くないのかその格好？」

「何だ、暖めてくれるのか猫？」

「……やっぱり、殺す！絶対殺すっ！死ね！」

取り出した小瓶。蓋を取り、彼女の口に向かって投げ込もうと手を振り上げる。

その隙を狙って足を狙われる。

「妾は基本的に室内では裸族だからのう……これでも煩わしいくらいじゃ」

寝台に寝転がったまま、そんなものぐさの癖に的確な攻撃をする。唯でさえ不安定な足場。バランスを崩した私はそのまま寝台に突っ伏した。その拍子に手から離れる小瓶。

中身は半分くらい零れてしまったが、まだ無事だ。指を伸ばすがそれは先に女王に奪われた。

「しかし寝所に毒を持ち込むとは、何とも無粋な……」

他の誰に責められても、この女だけには言われなくなかった。しかし部屋に立ちこめるその甘い香りに彼女は機嫌を良くしたようだ。

「ふむ……妾でも知らぬ香りの毒とは。折角じゃ、妾のコレクションにでも加えておくか」

「この無礼、珍しき毒に免じて許してやろう。さあ、続きを話すが良い」

小瓶を愛おしげに撫で、女王が微笑む。

これでリセットされた分の挑戦権をさっそく消費してしまった。自分の浅はかさが嫌になる。もう一度溜息を吐き、私は話の続きを語り出す。

「……………その女の子はどうしたと思う？」

「無論知らぬ。妾はその女ではないが故」

この女王は理屈屋だ。知識ばかりで塗り固められたその脳は、人の心を酌み取る配慮に欠けている。彼女にその気もないのが問題だ。その知識で大抵のことが当たってしまうから……………尚のこと。

何の本を読み“この話の作者の伝えたいことを何文字で記しなさい”とか聞かれたら、“知らぬ”とか“作者に聞け”とか絶対にいそうなタイプだ。“まずその命令形が気に喰わん”とも言いそう。

「処刑される前に人形を連れて村から逃げ出したんだ」

質問し甲斐のない相手に答えを求めた私が馬鹿だったのだろう。

私は諦め答えを口にした。

すると彼女は予想外の行動に出る。

「ぶつ……………くくくくく、ははははははははは！なんと愚かなっ！あははははははははは」

「爆笑するところか、これ……………あんたやっぱりおかしいよ。人の心がない！なさ過ぎる！」

抗議する私の顔を見て、女王は更に吹き出した。

「だって、ちょっと……あはははははは！馬鹿すぎる！その女の顔を見てみたいっ！」

言っておくけれど、その女は私ではない。私の顔を見て笑わないで欲しい。

[illegible]

*

「……という話だったんだけど、ここであの女が爆笑して咽せ込んで……それで結局続きは今日の夜ってことになった」

「……………とりあえず、あの女が相当歪んだ心根の持ち主だということは今更ですが再確認しました」

アニエスと私はどちらともなく大きな溜息を吐き、顔を見合わせ

5 Date et dabitur vobis・(後書き)

……色気がねえ(笑)そうか、今回はギャグ回だったのか。うん、きつとそう。後半がドロドロになるのはもう決まっているので無理にでも明るい話を入れたかったです。那由多にシエラザードと云わせてから調べてみたら、刹那姫はそのまんま女版シャフリヤール王だなあ。夜伽相手(以外もだけど)を殺しまくる血の女王ですから。

この章の主要キャラも揃ったところで伏線回収折り返しに行きたいと思います。

6 U b i a m o r , i b i o c u l u s .

夜になるとあの猫は律儀にも、話の続きを語りにやって来た。勿論来なかったら殺そうと思っていたが、これが進んでやってくるとは少々意外。

また0時を過ぎた時……私を殺すつもりか？いや……昨日をよくよく思い返してみれば、私がかかわなければ猫は牙を剥かなかったはず。

歯向かったところで返り討ちに出来る仕掛けはいくらでもあるが……今日は大人しく聞いてやろうか。そんな気分だ。

そうしたら、話し終えたとき……この猫はどんな顔になるだろう。

「悪魔は自分のために泣いてくれた少女を見捨てられなくて、人の姿に化けて彼女の前に現れる。少女はその手を取り、無事に村まで戻される」

「ち、生き延びたか……つまらん」

それでも正直者の私の口から、短い感想が漏れる。真面目な話を少しでも明るくしてやろうという私の心を酌むと良いぞ猫。

「そしてその瞬間、村中の桜の花が一齐に咲いたんだ」

そのまま無視されるのも何だか気に入らないな。別に放置されたのが寂しいわけではないが。

（桜の花？）

それは春の訪れ。それは喜ばしいこと。物語の住民達にとっても、けれども、猫の表情は堅い。

「悪魔の身体は雪で出来ている。本当なら触れるだけで少女を殺せる呪いの手……でも少女は生き残った」

少女は生き残った。けれど悪魔は死んだのだ。

それは何故？この文脈では理解できない。猫の語りが拙いせいだ。それでも……そうだな、声は嫌いではない。今日はいつものように喧しく吠える声ではない。穏やかな声だ。その穏やかさに少しづつ、眠りに誘われていく。

「悪魔は少女に恋をした。その温かさが逆に、悪魔の方を溶かしてしまった。だから村に春が来た」

その後少女は命の恩人が悪魔であったことを……自分がそれを殺めてしまった知り、深く嘆き悲しんだらしい。愚か者め、素直に救われた命を喜ばいいのに……失った命を嘆くなど愚の骨頂。

猫は言う。それでも冬は滅びない。毎年生まれ、毎年死んでいくのだと。

なるほど、タロツクらしい輪廻の話か。

「少女は毎年冬が生まれるのを待ち……そしてその手で何度も殺す。悪魔は何度も忘れ、何度も恋に落ち……何度も彼女に殺されていく。人と悪魔は決して交わることのない存在……それでも彼らは互いを想い合っていた」

少女に恋し、何度も殺される悪魔。

悪魔を愛し、何度も殺める少女。それはせめて己の手でという独

占欲か。

永遠の冬の世界では人間は生きられない。だから悪魔は少女を生かすために自らの死を肯定しなければならぬ。

人と悪魔の二人が辿り着ける世界など、何処にもないということだろう。

「けれど永遠の愛なんて、人にも悪魔にも作れなかった」

人同士でも作り出せないものが、違う種族で成り立つわけがないという気持ち。

人には不可能なことで、人でなければ生み出せるのではないかという期待の裏切り。

その言葉に私は納得半分、残りは失望に似た何かを感じていた。

「ある年とうとう彼女を思い出せなかった悪魔。けれど少女ののびした手を取り彼女を殺してしまう。その悲しみに悪魔は山へと籠もり……物語は繰り返される。次の泣いてくれる子が現れるまで……現れて失われるまで」

「だから雪の降っている日は、どんなに辛いことがあっても泣いてはいけない。悪魔に勘違いされて好意を抱かれるから」

「いいではないか。それならすぐに冬が終わる。村人全て集めて泣けばいい」

「……馬鹿姫」

呆れたように微笑む猫。言葉は失礼そのものだが、妙な気安さを感じる笑みだった。

「馬鹿とは何だ馬鹿とは！」

「悪魔はとても美しい姿をしているんだって。だから人間なんか
それを見てしまったた、絶対に悪魔を好きになっちゃ駄目なんだ」
「なるほど、まるで妾のこのようじゃな」

私の半分本気の冗談に、その自信何処から湧いてくるんだとでも
言いたげな微妙な顔の猫。

自分と同じ顔がここまで微妙な顔を出来るのだと思うと違う意味
で自信が折れそう。

「短命になりたくなければ人は人と恋をしろ。これはそういう戒め
か」

猫が言うには、この話は終わらない存在の永遠を嘆いているのだ
と。

「俺は悪魔が好きだったよ。春なんか嫌いだったから、このままず
っと……白い雪が降り続けばいいのに。そう思った頃もあった。馬
鹿だよな。それじゃあ作物も育たない……みんな飢えてしまうのに」

雪が好きだと猫は言う。何処か遠くを見るような悲しげな眼差し
は……故郷を思い出しているのだろうか。いつそのこと村人全てが
冬に魅入られ冬に殺されたなら……そんなあり得ないことを思いつ
いたのだろうか。

雪の運ぶ死は、優しく美しい死だから。そう小さく猫は呟いた。
自身も雪に殺されたいと言わんばかりのその言葉。

私にはよくわからない。雪とはそこまで心引かれる……優しいモ
ノなのか？

「雪か……それが祖国を苦しませる病魔だということは知っておっ
たが。それはあの美しい桜の季節を拒んでまで求めるような美しい

もののなのか？」

私の言葉に、猫の口がぽかんと間抜けに開けられた。

「雪、見たことないのか？確かこのセネトレアだって降るはず……」

「今は七月……妾が嫁いだのは二月………ギリギリ降りそうで降らなかった」

「なんだ、それじゃあもうすぐだ。あと四ヶ月……半年もない。1月にでもなれば雪は降る」

その言葉に私は吹き出さずにはいらなかった。この猫は私に雪を見せたいらしい。その言葉は……私を少なくともあと四ヶ月は殺したくないと言っているようなものだ。

「ふ……それまで生き延びる自信があるのか、猫よ？」

「は……あんたこそそれまで俺に殺されない自信あるんだな？」

からかってみると、売り言葉に買い言葉。本当に威勢だけはいいい猫だ。

「自慢ではないが私は恋人も愛人も愛玩奴隷も、一ヶ月の壁を越えたことがないので有名でな。ちなみに最短記録は三分じゃ」

「……って奴隷王は五ヶ月続いてなかった？」

「あれは仕事で殆ど国から出ていたからな、寿命が少しばかり延びただけじゃ」

（猫の予想する）私が殺した人数と、私の結婚期間に違和感を感じたらしい猫。

「……結婚してた頃から愛人作ったり奴隷買ったりしてたの？」

「問題はない。互いの浮気の許可。それも婚姻条件に入れたからかう」

「……………」

私の言葉に猫が絶対零度の冷ややかな眼差しで応える。

「だって狡いではないか！男だけ後宮が認められて女は許されぬなど納得いかん！女だから、女だから……そんな理由で男達は妾の行動をいちいち縛り付けてくる。だからそんな者は要らぬのだ」

「妾は妾……それだけじゃ」

私は猫相手に何を語っているのか。下らない。

私は猫へ背を向けて、そのまま深く目を閉じる。

＊

真っ暗だ。一面の闇。私はそこにひとり、浮いている。

「はて……ここは？」

声は出る。耳から聞こえる。ということはコレは夢ではないらしい。よくは見えないが両手の指を動かしてみるとその存在が確かめられた。

《汝、力を欲するか？》

私は力を持っている。これ以上何を望めと言うのか。

私は知っているのだ。知らないものばかりこの手に入り、本当に欲しいものは何一つ手に入らないこと。

「だってそんなもの……何処にもないじゃない」

《汝、犠牲の先の願いを肯定するか？》

犠牲？ああ、それなら肯定するわ。

みんな、みんな塵芥。私が求めるものを持っていない塵芥ばかり。だから私は誰も、何もいらさないの。

みんなみんな馬鹿ばかり。ああ、どうしてそんなこともわからないの。気付かないの。どうしてそんなに愚かなの？

《汝、幸福を求めるか？》

「幸福？何……それ」

＊

最初に求婚されたのは何時のことだっただろう。まだ十にも満たない頃だ。あの異母弟が殺される以前から、私には求婚者の群れが出来ていた様に思う。

「刹那様……私は貴女様をつ」

「刹那姫……某は貴女ほど美しい方を終ぞ見たことはありません！」

「私は貴女を愛しております、一目貴女を見た瞬間から一秒たりとも貴女を忘れたことなどないのです」

「いいえこの者よりも私がっ！」

「この国で拙者が最も貴女をお慕いしておりますぞっ」

「うゝん……そうね、それじゃあ貴方達全員、自分の首と胴体を切り離して明日またここへいらっしやい？そこでもう一度同じ事を言えたら、愛してあげる」

幼い私が妖しく笑んだ。

翌日、何も言えない首がいくつも私の寝所の前に並べられていた。あれには爆笑したものだ。普通に考えればわかるでしょう、私が貴方達を振ったこと。

幼少時からそんな日々が続いた私の中では、人の命の価値観が大分揺らいでいた。

あ、何だ……こんなものなんだ。こんなにあっさり死ぬんだ。あっけないなあ。

それでも心に響く死もあった。

それは異母弟の死、母様の死。

異母弟は、父様に殺された。何にも悪いことをしていないのに。生まれてきたこと自体が悪いことだったとも言っただろうか？

幼い私の中で弟は、ちょっとした悲劇のヒーローだったのだ。可哀想に。それでも何だかとても胸が高鳴った。可哀想と思えば思っただ。

彼自身については顔も知らない。知らないからいくらでも想像でき

た。空想で補った。それがよかったのかもしれない。何も知らないから欠点なんか知らない。どんな理想を詰め込んで私は彼に憧れた。

そして母様の死。

後追い自殺？馬鹿だなあと思った。

何にも知らないで、可哀想にとも思った。

それでもその程度を越えた馬鹿さがいいなと思った。愛する人のために、ここまでできるんだ。死ねるんだ。そうか……これが、愛つてものなんだ。愛とは無償のモノ。見返りも求めず、尽くして尽くして……そうして死ぬの。

あはは、私はごめんだわ。そんなの反吐が出る。

でも、悪くないわ。私がそうするんじゃない、誰かが私にそうしてくれるのは。最初はそう思った。でも……飽きてしまったの。

（男は糞だな……そう思ったのはその頃か）

成長する度にその思いは増していった。

私の顔、私の身体……みんな私の外側しか見ていない。

無償の愛？は……？どんなに見栄えの良い言葉を吐いたところであれでしょう？結局みんな同じ。単に私を抱きたいだけじゃない。劣情の愛よね、それ。私の心なんか要らないの。だって見えていないでしょ？見えなくても構わないんでしょう？

私さえいればいい。私が何を考えていても、誰を想っていても構わない。唯私を所有したい。自分のモノだと言い張りたい。それだけ。

自分の存在感のなさ、それを私で補いたいんでしょう？何も変わらないから、私を隣に置くことで自分の力を実感したいんでしょう

？それが虚像とも気付かずに。

だから傍に置きたいんでしょう？私を誰よりも自分の近くに笑わせるな。そんなの愛じゃない、せいぜい埃が関の山。

私は私。誰のモノでもない、誰かのモノになるつもりもない。どうしても私が欲しいなら、そっちが私のモノになればいいじゃない。そんな我が儘。それさえ私の前では叶ってしまう。

私を抱きたい？それが叶うなら金も命も必要ない？

ふうん……そうなんだ。それじゃあ、やって見せてよ。

目の前で全財産焼き払いなさい。貴方の妻子すべての首をここに並べなさい。

出来たら一晩貴方を私のモノにしてあげる。瞬きひとつしなくなった家族に見つめられながら。そして最後、明日の朝は貴方の処刑。貴方の悲鳴はいい目覚ましになってくれるでしょう。

へえ……出来ないんだ。貴方も口だけだったんだ。

そんな嘘付きはこの世界には要らないわ。私の視界にも。だから、ねえ……殺してあげる。

所詮本気じゃないんでしょう？愛してるなんて腐った言葉、二度と言えなくしてあげる。

どれだけ本気？私のために、どこまで出来る？

そうね、私も貴方も別の人間。完全に理解し合う事なんて不可能だから見せて、覚悟を見せて。そして私に証明してよ。狂って、堕ちて……ここまでおいで。そしたら貴方を愛してあげる。奈落の底で貴方だけをずっと好きでいてあげるから。

あ、ごめんね。貴方に飽きちゃった。だって貴方つまらないんだもの。薄っぺらいんだもの。まだ気付かないの？随分貴方は幸せね。

私は貴方を愛してなんかいないし、貴方も私を愛してなんかいないのよ？

それに気付かない貴方は要らないわ。

さあ、首を刎ねなさい。

*

「くくく……あははははは！そうだそうだ！そうだった……すっかり忘れていた」

目的が手段となり、手段が楽しすぎて目的を忘れていた。そのために私はここへ嫁いで来たのに。

「次の獲物はもう決めていたんだ。なあ父上……一番の大嘘つきの首を刎ねるのを忘れていた！」

そのためのセネトレア、そのための王座。
そのための人形、手駒達。

母上は馬鹿だ。愚かだ。

それでも私は母上が大好きだった。だから私はあいつらが許せない。

母上は愛した人間二人に裏切られたのだ。無償の愛を注いでいた、二人の男に。

つい最近まで、私もその一人に騙されていた。だから、余計許せない。この手で殺してやる。その首、切り落としてやろう。

地に頭を垂れる。跪け。そしてすべてを謝罪しろ。

勿論許さない。どうやったら長く苦しんで死ねるか……随分試した。だから効果的な処刑方法を私は誰より知っている。でも安心して、最後は必ず殺してあげるから。

メラメラと燃えさかる炎。その中に投げ込んであげる。計算はもうしてある。相応しい温度と時間、高さ。何日かけて燃やし尽くそうか？途中で消して水攻めにして……もう一度。

声は言った。力が欲しいかと。

「力？力はいくらあっても構わぬな……」

暗闇に光が差し込む。

私はそれに手をかざす。

歌が聞こえた。声が聞こえた。私はそれを受け入れた。

光に触れた右手が熱い……

黒を塗り替えるそのまぶしさに、私は思わず目を伏せる。そしてもう一度それを開いたとき……

「……………む？」

随分と変な夢を見た。夢の中とはいえ手が焦げるような痛みがしたが……何だったのだろう。そこまで考え私はまだ手が温かいことに気がついた。

「那由多？」

猫の手が私の手を掴んでいる。眠っているようだが随分震えてい

る。

（悪夢でも見ているのか……）

そもそもコレにとっては私自身が悪夢のようなモノだろう。せめて離れてやろうと思うがこう掴まれていてはそれも叶わない。

「…………泣いているのか？」

私にはわからない。人の死とはそこまで悲しいことだろうか。もし私は生まれ育ったあの王都が滅ぼされたとしても何も感じない。むしろよく陥落させたかと相手に拍手を送りたい。

母上の死だって、悲しくはない。腹立たしい、気に入らないだけだ。

他人の死によって涙など、流したことはない。私も人間だ。自分のためにしか泣けない。他人の不幸を自分のモノだと勘違いして背負い込み、涙するのは唯の偽善だろう。

これは何故復讐をする。それで失ったモノが戻ってくるのならそれは道理。けれどそれが叶わないのならそれは唯のエゴ。己の正義感だとかヒロイズムとか……そう言った欲求を埋めたいだけ。

（猫よ……お前は どうして泣くのだ？）

「……っ、兄……さん」

これは多くのものを失った。父も母も兄弟も。それでも猫はその一人しか呼ばなかった。

詰まるところ、それは……その一人のための復讐なのだろう。

(兄……か)

兄なら私にも一人いた。それでも私は泣かなかったし、泣かないだろう。

むしろ笑うだろう。笑っただろう。

私より母上に愛されていたくせに。私より母上を愛していなかったくせに。

父は他の女を、母は父を、その目に追っていた。

手に入らないならと代用品。父は私を、母は兄を愛した。

だから私は父を、兄は母を愛した振りをして心の底では嫌っていた。

(那由多………)

この少女にあの名前を付けたのは……何故だろう。

私も、代用品が欲しかったのか？

そう心に問い掛けてみると……そうかもしれない、そんな答えが返ってきた。

私だけを見て、私だけを追ってくる瞳。

それならば、これは相応しくない。

これは私を見ていない。そのたった一人のために泣き、たった一人のために私に牙を剥き、私を見ている。

せつかくとっておきの名前をあげたというのに、それがなんだか気に入らない。お前はその名を持つのにどうして私を見ないのか。

このまま手を握ってやっているのも癪だ。

「……………てい」

開いている左手で猫の頭を強打してみた。
情けない声を上げて猫が目を開く。

「……………夢？」

「随分うなされておったぞ？」

繋いだ手を軽く振り、にたりと私が微笑むと……………猫の顔が一気に青ざめる。しかし照れてもいるようで頬が赤い。それを同時進行とは何とも器用な……………

「は、離せっ！」

「何を言う、其方が勝手に掴んできたのだろうか？仇相手に何をして
ある」

「ち、違う！これは……………」

「違わないだろう、どうみても其方の手が妾の手を掴んでおるうが」

そう問いつめれば、猫が俯きながら小声で言い訳を口にする。

「……………なんか、凄い魔されてたから、いつもの癖で」

そう言えば猫には多くの兄弟がいたらしい。年下相手に子供扱いされるとは屈辱だが、これは私のために思ってたことだったらしい。
しかし……………心当たりが皆無だ。

「笑っていたの勘違いではないのか？」

あの夢はうなされるようなモノではない。

あの夢を見る前に、私は他の夢でも見ていたのか？

「……妾は何か言っていたか？」

「別に、何も……」

「ほれみたことか！くくくく……やはり其方の見間違いじゃ！恥ずかしい奴め」

「っ……悪かったな！」

笑い転げる私に猫はそう言い捨て、勢いよく手を離す。

「……………？これは……………」

私の右手。今の今まで猫に掴まれていたその手の甲にはスパーダに似た紋章。ひっくり返せば掌には2の文字。

「……………那由多、優しい妾は怒らぬから正直に申してみい？」

手を繋いで隠していたのはこの落書きのせいだろう。こんな嫌がらせをしてくるとは……意外にこの猫は侮れない。鏡でも見に行かなければ……きっと顔にも落書きされているに違いない。

「うわぁっ！なんだよこれっ……………」

どう料理してやろうかと企む私の目の前で、猫からあがる素っ頓狂な声。

「……………あんたどうしてこんな嫌がらせするんだ！俺がのんきに寝

てるのが気に入らないからって子供っぽすぎる！」

見れば猫の手にも似たような落書きがある。なるほど、そうやって自分も被害者ぶり、第三者の犯行と見せるわけか。

「甘いぞ猫！この寝室には二重三重の罠が仕掛けられて居る！部外者など絶対に入り込めん！そして妾が犯人ではないことを妾は知っている。すなわち犯人は其方以外に誰も……」

「これまさか……あの夢か？」
「話を聞け！」

私の華麗な推理を無視し、猫はしばらく考え込み……ちらりと私の右手へ視線を向けた。

「……あんたも見たのか？」
「見たとは何の話か？」
「声が聞こえて、歌が聞こえて……カードをこの手に取る夢だ」

猫の手にはダイヤの紋章。そしてナイトを表すJの文字が記してあった。

朝……私が目を開けると隣に女王は居なかった。廊下へ出てみると何やら騒がしい。話しかけてみようとするが、みんな忙しいのだろう……相手にもしてくれない。

（何かあったのかな……）

とりあえずアニエスの所へ行ってみようか。そう思ったときだ。

「……あ」

私の目に入ってきたのは、向こう側から歩いてくる女王の護衛の騎士二人。

無表情に頭を下げる背の低い男と、うつすらと頬を赤らめながら手をあげて挨拶をする長身の男。二人とももの凄い目をそらしながらの挨拶だ。

「……よ、よう」

「出歩けるようになったんだ、良かったね子猫」

「ええと……」

トライなんとかって呼ばれていたような。でも二人とも似たような名前だった。どっちがどっちだったなんて自慢じゃないが、覚えていない。

こんなに城中忙しそうなのに、この二人と来たら唯ぶらぶら退屈そうに歩いて居るようだ。

「そ、そういえば城ざわついてる、何かあったの？」

「僕らは非番。珍しく女王が公務をする気になったらしいし、今は

暇してる」と」

「僕らは姫に仕える契約騎士。金で忠誠を誓ってる間柄。こっちの突っ立つてる奴はトライアンフ、僕が…トライオミノス」

「しかしめんどくせー名前だと思わないか？タロツク表記にすると虎壱杏腐に虎壱臣之数つてところか？契約したら漢字称号の権利を贈られたんだが…なんか合わねえよ」

どうしてだろうこの軽い方の名は、なんだか美味しそうな気がする。なんとなく。

「あのお姫様は一発で覚えてくれたけど、ややこしい名前だろ？俺は略してイアン、こっちがイオス」

背の高い方が低い方を指さしながらそう言った。言われた方は溜息ながらに愚痴をこぼす。

「別に僕はライオスでもいいんだけど、そうするとイアンはライアンになるから嫌だつて却下されたんだ」

「だってイアンの方が格好良いと思わない？」

「全世界のライアンさんに謝れ。それからイアンさんにも」

「なんでだよそれ」

「イアンさんは、君と同じ呼び名になった不幸」

「あはははは！とりあえずお前が俺に謝れ、あははははは」

イアンの笑うツボはよくわからないが、二人が仲が良いということとはなんとなくわかった。

二人とも同じ金髪だし、同郷者なのかもしれない。

「二人はカーネフェル出身？」

「おう、身内でもないのに名前が似ててな、意気投合よ！」
「もとい…こいつがまとわりついてきてるだけなんだけど」
「おいおイオス！つれないこと言うなって！俺とお前の仲だろ？」
「筆記試験でカンニングを提案してきた隣の席の人と、それをすかさず通報した人の間柄だよな」
「元々俺達は前の王に仕えてた契約騎士なんだが…、もう一月になるか？あんなことになっちまっただろ？突然解雇なんてあんまりだつてことで、引き続き姫が雇ってくれてるんだよ」

（あんなこと……）

彼らの言葉かが推測するに、一つしかない。あんなこととは、セネトレア王が暗殺されたことだろう。

ステイブロットが滅ぼされたのもちょうどその頃。もう一月も経ったのかと軽く驚く。タロツクの大陸を抜けるまで十日……そこから船に乗りセネトレアに渡るまで更に五日。市場で一日。城に来てからもう七日……もうしばらくすれば確かに一月が過ぎてしまったことになる。

それなのに私はまだ、仇が討てない。一月で仇の懷まで潜り込めたと考えれば早いほうなのだろうか。

「でも基本的に今度の主、造形フェチだからね…あんまりに酷い奴は問答無用で解雇されたよねー僕らは可でもなく不可でもないとかでギリギリセーフだったけど」

「ああ、でももの奴なんか姫に解雇通告されたとき声をかけてもらえただけで感激してたぜ」

「馬鹿だからだよ。そういった意味じゃ君も十分素質があつたのに」

「確かに美しい方だが俺の趣味じゃねーんだもん、仕方ないだろ」

「ほんと、姫は変わってる」

「そうそう！姫に気がある奴は並々ならぬ忠誠を誓っているにもか

かわらず決して重臣にはしない」

「それでいて僕等のように軽口を叩くような奴を騎士にしたりする」

「もつとも同僚の入れ代わりが激しい職場ではうわさ話もさほど意味ないんだけどな」

「君は長生きできると良いね、子猫」

ポツリとイオスが言ったその言葉が、私の耳に響いて頭の中で繰り返される。

そんな私を置いてきぼりで、二人は勝手に話を進める。主にイアンの方が。

「なんだその……あんだ、………先日悪かった。少々酷いこと言つて」

気まずそうにそう言うイアン。私は何か言われただろうか。

「いやほら……洗濯なんとかまななんとかとか」

「……あ！」

今の今まで忘れていたのに思い出してしまった。つい条件反射で殴りかかりそうになるのを何とか堪える。

謝罪している人間を殴るのは後味があまり良くない。そう思ったから。

「昨日は姫が大笑いして俺らに話しに来るしよ……つかあの人契約騎士のこと茶飲み友達か何かと誤解してね？」

「女の子の猫なんて、初めてだよ。騎士たる者、主が望むなら茶飲み友達の仕事もなくちゃいけないんだよイアン」

「ああ、何があつたんだ……あの姫に。え、そうなのか知らなかったぜやべー減給されてつかもな」前茶断つたし」

「唯の気まぐれか、古今東西の男を食い尽くして、飽きて女に走つたに一票。ご愁傷様」

「ところで嬢ちゃん、何歳？」

この二人の会話は早い。口を挟む前にすぐ終わり、口を挟む前にすぐ変わる。ついて行けない。

「14…そろそろ15」

「そっか、ならまだ見込みありだぜ！頑張んな！お裾分けだ」
「……？」

私の言葉に、何かを差し出すイアン。

とりあえず受け取ってしまったが、魚の干物やチーズなどの乳製品。彼らは手に酒も抱えているしこれをつまみに酒盛りでも始めるつもりだったのかもしれない。

「調理場からちょっと食材奪って来たんだ。小腹空いたし見たところ朝飯まだだろう？俺等もまだだ」

「あのウシ乳女王様は19だったか？もうあれ以上はならねーだろ、カルシウム取って見返してやれ！」

そう言えば女王と私の背丈は殆ど同じ。私は年下だし、まだ追い越せる。

「……何だかまだまだ背が伸びそうな気がしてきた！」

「あー……そっちな」

励まされたことに喜ぶ私に、すこしがっかりしたような表情になるイアン。その横でしきりに頷くイオスがいる。

「確かにあれに見下されるのむかつくよね。いっぺんでいいから見下してやりたいよ」

「……確かに、気分良さそう」

イオスと堅く握手をする私に、イアンが首を振る。

「いや止める止める。あの角度は危険だぞ？見下されてるおまえらは嫌味な女王にしか見えないだろうが、見下す側からすると常に上目遣いみたいなもんだからな。趣味じゃなくとも正直くらっと来るぞ」

「それは君が変態だから一票」

「おいおい男に変態は褒め言葉だろう」

誇らしげに胸を張って言う言葉だろうか。男ではない私にはよくわからないけど……いつだか兄も同じようなことを弟たちに言い聞かせていたからそうなのかもしれない。

「そう言えば子猫……いや、嬢ちゃん。何やら考え込んでいるようだったが何かあったのか？」

「イアン……猫に手出したら打ち首だよ」

「うつせーなイオス……男子たるもの、落ち込んでいる女子は慰めるべし！って諺があるだろう」

「知らない」

「俺の辞書にはあるんだよ」

「それ、編纂した奴の顔が見てみたい。きっと阿呆面してるんだろうな」

「作詞、作曲、俺」

「君……その頭でよく王宮試験受かったよね」

「女王付きは、外見、声、学力、剣技、趣味、体力って項目だったか？実技って裏口もあったな確か」

「僕等の時は筆記と剣だけだったけどね。」

話は逸れてきたが、イアンは私を心配してくれているようだ。二人は金で雇われている騎士。他の人々とは違い、あの女王への忠誠心はみじんにも感じられない……普通の人だ。それなら相談するのもいいかもしれない。

「騎士ってことは……イアン達は強いのか？」

「ま、まあな」

「それなら俺に付き合ってくれないか？」

何故かイアンは赤面して言葉を失い、隣でイオスが吹き出した。

*

「ああ、付き合ってそういうこと」

中庭に連れてきたイアンは肩を落として苦笑している。

私は剣の稽古を付けて貰いたくてここまで連れてきたのだが……

「他に何かあるの？」

「あれを勘違いするのは頭悪いイアンくらいだ」

振り向けば、イオスはまだ時折イアンを見ながら吹き出している。そんな相方に嘆息し、切り替えた笑顔でイアンが私に聞いてきた。

「嬢ちゃん、剣はどのくらい？」

「村で少しかじった程度。一応傭兵の村だったからそこそこだとは思うんだけど、あいつに勝てない……」

「あいつ？」

「女王だ」

私の言葉に二人の騎士は、青と緑の瞳を少しばかり開かせた。

「あーあの噂マジだったのか」

「あの姫いろんな好きだから、てつきりそういう趣向なのかと思つてたよ今回は」

「しかしな、姫が剣使えるなんて初耳だな」

護衛の必要がないんじゃないかと言うイアンに、私は言葉を付け足した。

「剣は使わない、大抵毒にやられる」

もちろんそれだけではない。部屋には毒の仕掛けだけではなく、落とし穴まであったり迂闊に歩けない。それも毎回位置が変わる。本人以外あの部屋で安全に過ごせる人間はいないだろう。

あの女の知能は異常だ。人体の急所どころか何処を蹴れば動きが止まるだとか、バランスを崩すかだとか……そういうモノを瞬時に見抜ける瞳と脳を持っている。そして記憶したモノは絶対に忘れない。

「毒の王家の姫つてのは伊達じゃねえなー……何か弱点とか気付いたことはないのか？」

顎に手を当てながらイオスが尋ねる。こうやって日の下に連れてきてわかったが、イオスは色が白い。更には憂鬱そうな表情をして

いるせいで……昼間の中庭が似合わない。顔はそれなりに整っているのに、じめじめしたかびくさい部屋に居る方が絵になる印象というのはどうなのだろう。

（そんなことより、あの女の弱点……弱点……）

私は足りない頭で必死に考え、そして答えを絞り出す。

「性格が悪い……寝相がもの凄く悪い」

何か違うとは思うが、弱点とは欠点みたいなものだろう。それならこれでいいはずだ。

あの女は本当に性格も悪ければ、寝相も悪い。広い寝台。4、5人は余裕で寝転がれるその場所から、私は毎晩蹴り落とされている。一番酷かったのは……目覚めたら落とし穴の中にいたことだ。ちなみに今朝のことだ。

「……本人からしたらだから何って感じ」

「確かに周りしか困らない弱点だな……攻めようがねえ」

騎士達は顔を見合わせ互いに失笑している。

イアンは首を捻り空を見上げる。色素の薄い瞳の青と空の色がよく似ていて、彼の瞳が青いのか、空の色がそのまま映されて青いか解らなくなる。私の赤なんかより、綺麗な色だ。少し、羨ましい。イオスの緑も、心安らぐ若草の色。二人とも自然の色だ。私なんか……鏡を見る度思い出すのはあの炎。村を襲ったあの色だ。あの夢の中……この両眼を刳り抜いてしまいたい……何度そう思ったか。

重い溜息を吐く私の肩を、励ますように叩くイアン。

「敵の弱点を知るには、敵を理解するしかないだろうな」

「確かに、君の今の状況はそう言う意味では恵まれている」

イオスが頷く。

「それかいつそのこと、君が彼女の弱みになればいいんじゃないかな。君なしじゃ生きていけないくらい溺れさせた後……捨てればいい」

「え？」

あまりに自然に紡がれた言葉だから聞き逃しそうになった。今イオスはとんでもないことを言わなかったか？

（あれ、でも……）

似たようなことを何処かで聞いたような気がする。ああ、確かア二エスが……

「あの女王は誰にも心を許さないから……効果的だろうな最高の裏切りだよ。心が砕け散るんじゃない？ 身体の傷は癒えるけど、心の傷は生きている限りずっと血を流し続ける……殺すだけが復讐じゃない」

「えげつねえー」

呪いを紡ぐような相方のおどろおどろしいその声に、声は笑っているが明るいイアンも真顔に戻る。

けれど彼の言葉は、強い説得力があった。

セネトレア王の死。あっけない終わり。彼は死の瞬間、己の行い

を悔いたろうか。罪を認めただろうか。

そうだ、全然足りない。一瞬の死なんかじゃ、苦痛が全然足りない。そんなにすぐ解放されていいはずがない。せめて……そうだ。殺した命の数、殺されるべきなのだ。そうでなければ、不公平だ。

（私が……あの女の望むモノになる）

そして、信用させて心を許させて………そこから絶望のどん底まで叩き落とす。笑顔が慟哭に変わる様を見ることが出来れば、少しはこの心の渇きも癒えるだろう。復讐の炎も収まるだろう。

武器は剣だけではない。そうだ、頭を使え。あの女のように、あざとく狡賢く立ち回れ。

そうか、やっとわかった。アニエスが言っていた復讐とはこういうことか。

「ありがとう、イアンにイオス！私、頑張ってみる！」

あの女のことをもつと知らなければ。じゃないと、絶望を教えられない。

私は二人に手を振り、背を向ける。

すぐに走り出した私は気付かなかった。私の手を見た二人のその表情に。

「刹那様！混血を城に招くとはっ！」

「コレは請負組織、裏の社会のならず者ではありませんか！」

「妾は神など信じぬが、それでも存在するモノは信じる。数術使いは確かに居る。だからコレの言うことは間違いではない。良いから黙って聞いて居れ！」

私がそう怒鳴ると家臣共はようやく口を噤む。これ以上喚くのなら片端から首を刎ねてやろうと思っていたが手間が省けた。

私の許可を得た数術使いは、すうと息を吸い……高らかにその詩を口にする。

「《開かずの箱が開かれし時、天地は逆さとなり、世界は束の間の夢をみせる》

《幸福なる者、僅かな数字を。不運なる者、王の座を》

《されど己が生まれ持つ、赤き血までは騙せない》

《女王を処刑台へと送るのは、全てを統べる王だけ》

《騎士を解雇出来るのは、KとQの二人だけ》

《騎士は数兵達を虐殺し、数兵は小さい数値を刈り尽くす》

《最も小さきAの兵士、己が周りは敵だらけ》

《逃れることだけ許された、Aが向ける矛先は……世界を操る愚者へと向かう》

《王を殺めた道化師に、不可能事は……何もなし》

《見誤りし愚か者共、己が数に身を滅ぼされん》

《四の紋章、五十四枚の紙切れ。同じ血同士、殺し合え》

《塔へと至る四枚に、双子模様は残されぬ》

《三層り…最後の一枚、望む世界に君臨す》」

それが謳う詩。それは昨晚あの夢で耳にしたそれと一文字も違わぬもの。

「聖教会から開示された情報に寄れば、教会に伝わる“開かずの箱”が開いたと聞きました。これはその蓋の裏に記されていた詩です」「開かずの箱とは何のことじゃ？」

それが耳慣れないのは私がタロット人だからだろう。タロットは自然を崇拜する多神教。カーネフェル人のように、聖教会の偶像崇拜を受け入れず、国内に持ち込ませることさえ禁止した。だから聖教会関連の情報を私はあまり持っていない。

それでもタロットにも数術使いは存在したから、私はこれと呼んだのだ。

「その箱は、神から預けられたというシャトランジアに伝わる国宝……“審判の箱”。それは神の意志なしに開くことは無く、それが開いた時……箱から希望が世界へ飛び散り、箱の中には絶望のみが残される。希望を持つモノ達の力でその絶望を打ち破らなければ、一年後……この世界は滅びます」

その言葉に取り巻き共が取り乱す。仮にもこれがセネトレアを動かしている者達かと思うと……情けなくて溜息が出る。

「神は我々人間を試しているのです。世界の存続か滅亡を賭けて……」

「それが、この奇っ怪な文様か？」

私が右手を見せると、数術使いは静かに頷く。

「はい。それは……カードに選ばれた数兵……希望の証。一つ一つは小さな光。その希望の光を増すためには光を一つに集める儀式が必要……」

「つまり一人を残して……残りの希望を叩き潰せ。そう言うことか？」

「はい」

それは頷く。

世界を続かせるための犠牲。それが五十程度ならあまりに安い。

これはいい理由になる。他国を攻めるのも、内から壊す……そのどちらにも。

平和を掲げるシャトランジアも数世紀ぶりに重い腰を上げるだろうか、それとも国内のカードを集めてすべてを自害でもさせるだろうか。

世界が減るか、存続するか。

どちらにしても、この一年は退屈しないで済みそうだ。私の首を狙いに来る者が後を絶たないということだろう？ しかも私はその殆どに対峙したとき、無抵抗に殺されなければならないと決められている。それを逃れるためには……考えるだけでいい暇つぶしになる。

しかしその不平等に選ばれたことに異議を唱える者もいる。ユリウスだ。

「そ、それでは私は……唯殺されるのを待っているだけと言うのか呪術使い！」

普段は冷静ぶっているが、こういう場面で化けの皮が剥がれるタイプだったか。私とそう年も変わらないくせに、肝心なときに肝が

据わっていないとは、所詮あの男の子供と言うことか。

金の計算には優れた頭脳も、状況判断解析能力には劣っているようだ。少し考えれば気付くだろうに。

「誇りなさいませユリウス殿下。貴方は神からこの国の最高幸福者と認められた方なのです」

その数術使いはにこりと彼に微笑んだ。それは祝福を与えるような優しい笑顔にも、絞首台の人の背を後押しするようにも見える不思議な笑みだ。

「貴方には地位と権力、そして富……それを動かす力がある。弱きカードでも、貴方は頭を使うことでそれを乗り切る力を既に与えられているのです」

「つまり強きカードは……不幸な者……この国の最下層に集中していると言うことか」

「やっと気付いたかこの虚け」

カードとしては彼らに無抵抗で殺されなくてはならないユリウスも、法と軍を用いてそれに対抗することが出来る。互いが互いに平等。一見不平等なゲームに見えて、これは実は平等なものかもしれない。

「しかし数術使いよ、それなら何故妾がAではないのだ？少なくともユリウスよりは妾の方が力はあるう？」

私が至極当然な疑問を尋ねると、数術使いは同じ笑顔で微笑んだ。

「刹那姫……貴女の上にはタロック王がいらっしやいます。スペードのAは須臾王ですから」

「……………それは、それは……………面白い！」

「面白いではありません！これは国を揺るがす大変な事態です！革命だって起こり得る！」

多くの者に命を狙われるこの私が、あれだけは殺しても良い権利を与えられたということ。

シャトランジアの神……………なかなか見所がある。

ユリウスが何やら喚いているがそれしきのことを気にする私ではない。

「神など居ない……………そう言っていたが、今なら信じてやっても良いぞ！其方は実に優れた数術使いじゃ！タロットにもこれほどの者は居なかったというのに……………」

まるで千里眼。これには全てが見えているようではないか。比べものにならない。

祖国の数術使いはせいぜい明日の天気がわかるとか、一週間後の天気がわかるとか……………当たるとはいえどうでもよい情報ばかり寄せたものだ。四季折々の自然を愛するタロット貴族には重宝されていたようだが、私にはどうでもいいことだった。

どんなに綺麗な花だって、どうせいつかは散るのだから。いつ咲こうがいつ散ろうがどうでもいい。どうせ無くなるのだから。

それなら枯れない花を生み出す研究でもすればいいのにと呆れて眺めていたものだ。

「しかし……………魔女と聞いていたが、其方はどう見ても美男にしか見えぬ」

情報請負組織、TORA。その頭である混血児トラ。性別不明、

年齢不詳……セネトレアの魔女と呼ばれるその人物。噂には聞いてはいたが、私がトーラを見るのはこれが初めてだ。

「情報を司る者が、情報を掴ませてしまつては意味がありません。僕自身の情報は須く偽りですよ」

それは噂が？それとも今ここにいる情報屋自身の姿が？

なるほど、こういう嘘ならば悪くない。いつか暇つぶしにその正体暴いて見てもいい。

けれどこんなわけのわからない状況でなければ、この情報屋が王宮に現れることもなかっただろう。まず、貴族達がそれを許さない。

請負組織とはセネトレアの裏社会の人間達。私が嫁いで来た前後にもこのベストバウアーで勢力争いをし、その間貿易はストップしてしまい……世界とこの国の国庫に多大な被害をもたらした。

国が表立つてそんなならず者達に接触するのは不味い。ましてや相手は混血だ。このセネトレアは混血発祥の地であり、その迫害者の最も多い場所。

私の奴隷趣味が受け入れられているのも、私がそれを惨たらしく殺すから。私が処刑するのは純血も混血も分け隔て無くなのだが……あの狂王の娘ということで私も混血迫害者の中ではその第一人者と思われているらしい。私のやり方に民が文句を言わないのもおそらくそのせいだろう。セネトレアの人口の半数以上を占めるタロツク人……彼らは皆、例外なく純血至上主義者なのだから。

（混血か……それにしても市で見かける者とも違う）

何処が違う。……ああ、瞳だ。

混血は髪は純血と変わらない者もいるが……目だけは違う。

変装か、影武者それとも本人か……少ない情報では判断しかねる

が、その容貌は実に異様。

カーネフェルの金色の髪を持ちながら、その瞳は青でも緑でもない。他の色でもない。……これは虎目石。あれを両眼に埋め込んだような不思議な輝きを放っている。なかなか珍しい混血だ。

「ところでユリウス、其方はこの国で最も幸福だと思われるらしいぞ？」

遊び惚けている私に代わり、彼がこの国を納めているようなもの…… そう思われてもおかしくはない。

「其方は神とやらにこのセネトレアの長に選ばれたのじゃ。上手く立ち回ってみよ。それを見守るもまた一興」

「……っ、セネトレアに法令を発布する！検問所で通行者の両手を調べよ！拒む者は通行を認めん！刻印のある者は城へ連行しろ！まずは城からだ！城に居る者！商人組合！その中にカードはいないか確かめろ！」

ユリウスが指揮官となりセネトレア包囲網を布く。

まあ、打倒な判断だろう。

「本物の刻印付きを連れてきた者には褒美を取らせるとも言え。その方が手っ取り早い」

「しかし……民の税をそんな風に使っては」

「ユリウス、貴様は死にたいのか？それともセネトレアを滅ぼしたいのか？」

こんな時まで頭の固いことを言っている場合ではないだろう。

「民あってこそその国？いいや違うな、世界あってこそそのセネトレア

！世界が滅んでしまつては元も子もないだろうが愚か者！」

一度そう怒鳴つてやると、ユリウスは面食らつたような顔になる。そして彼は私の言葉を繰り返し、それを良しとした。

その言葉を受け、命令を遂行するため捌けていく者達。あの数術使いも私に一礼した後それに混ざり消えていく。

「ふああ……さて、妾は二度寝でもするか」

今日は朝から働いて実に疲れた。これは二度寝くらい許されてしかるべきだろう。昨日はあまり寝ていないのだ。

あの猫は、あの後も眠気に勝てなかったのか寝直していたが私は違う。あの詩について考えている内に朝になつてしまっていた。

しかし……敵の前で暢気に寝顔を晒すとは、あれも愚かだ。床で寝ていた農民の猫にとって、私のふかふかの寝台の魔力には抗えないらしい。

（チャンスだろうに、馬鹿め……）

挑戦権は一日一回だなんて一方的な決まり、殺してしまえば破つたところで誰にも咎められないのに。

*

あらかた命令を終えた私の前に現れたのは、刹那姫が呼んだ数術使い。

その、ありふれた金の髪に騙されてはいけない。猫のような……

その鋭い目。その瞳の輝きの内に一体何を企んでいるのか。こちら側の全てを見透かすようなその目は、自分のことは一切外へは漏らさない。だから心が許せない、信用できない。

「まだ帰っていなかったのか？」

声をかけて帰らなければ、警備兵を呼ぼうか。そう思ったがどうやらこれは私に用があったらしく、声をかければすぐにこちらへ寄ってくる。

「失礼ながら殿下、一つお伺いしたいことがあります……本日の情報料代わりに」

「金なら払う。私から請負組織などに教えることは何もない」

追い立てるようにそう言えば、俯きがちにそれは不思議なことを聞いてきた。

「僕の名前、ご存じありませんかユリウス殿下？」

「名前……だと？」

請負組織TORA。だからこれはそのままトラと呼ばれている。それが本名か偽名かなど本人以外解らない。そんなものをどうして他人の私が知っていよう。

「知らないな。私は忙しい、さっさとお引き取り願おう！混血の顔なんてあの方の客人でなければ見たくもなかった！これ以上居座るのなら商人組合の連中に引き合わせてやろうか！？」

混血なんか。汚らわしい。父上とこの国が生み出した、忌むべきモノだ。貿易相手だからこそ我が国はいい顔をして受け入れてやつ

たのに、カーネフェリーめ、こんな化け物を生み落とすとは。こんな目、私たちとは違う。こんな得体の知れないモノ……

「そっか……貴方も同じなんだね。そうだね……そうやって育てられてきたんだ。価値観なんか変わらない……変えられないんですよ？死ぬまで、きつと」

私の視線の蔑みの色に気付いた化け物は、悲しそうに微笑んだ。人間ぶるのも大概にしる。見ているだけで……殺してしまいたくなる。聞けば父上を殺めたのは混血の殺人鬼だったという。だからもつと殺せば良かったんだ。躊躇う必要なんか無かった。すべて焼き払ってしまえば良かったのに。

「幸せなユリウス様。確かに貴方は幸せだ。貴方はその地位の下に、どれだけの兄弟の亡骸を埋めてきたのか知らないんでしょう？」

化け物が呪いの言葉を口にする。私を誰だと思っている？
神経を逆なでするような化け物の言葉に、私は声を張り上げていた。

「それが貴様と何の関係がある！」

半年前の殺戮。あの人がやった。

だって役に立たないから。邪魔だから。

刹那姫。貴女がそう言うのならきつとそうだったのでしょうか。

馬鹿な妹、弟達。死にたくないのなら他人に必要とされるだけの何かを磨けば良かったのだ。唯国庫を喰い減らすだけの生より余程有意義な死。

彼奴らだって本望だ。あんな美しい人の願いのために死ねたのだから。

口から零れる私の乾いた笑いに、化け物が哀れみの視線でそれを見る。

「あの人は覚えているよ。どんな小さな犠牲だって、どんなに昔のことだって……ずっと胸を痛めてる。どうして貴方がAかわかったよ！所詮貴方はエース！キングにはなれないんだ！だって、その資格がないんだもの」

私はセネトレアの王子だ。こんな化け物に侮辱される謂われなど無い。

「混血風情が王族の私を愚弄するか！？」

「兄弟の名前さえ、覚えていない兄様なんか……僕には要らないんだ」

化け物が、ぽつりとそう……呟いた。

その言葉に私は顔を上げる。見つめる先、見覚えもない男が笑っている。

「やっと心が決まったよ……僕は彼らの味方に付く。犠牲の上に立ち、その犠牲の名さえ記憶に留めない貴方にはTORAの力は貸せません……いくら金を積まれても、僕が貴方に与える情報はあれが最初で最後のもの。情報請負組織TORAは暗殺請負組織SUITに力を貸し、このセネトレアに革命を起こしましょう！」

「なっ……革命だ！？そんなものこの私が断じて許さん！」

「手始めに、貴方から！」

目に見えなかった。

一瞬で男は視界から消え……ふわりと金色の髪が瞳に踊る。

痛みを感じたのはその刹那。迷い無く、心臓に突き立てられた刃の冷たさ。それを感じながら、私は冷たい床に跪く。

「……………さようなら、幸せなユリウス兄様」

「……眠れん」

欠伸をかみ殺しながら私はごろごろと寝返りを打つ。

眠いのには眠れない。酷く不快で不愉快だ。その苛立ちがまた眠気を遠ざける。何もかにもが気に入らん。シーツの手触り、部屋の香、壁の色も気に入らなく思えてきた。全て私が私のために用意させたお気に入りのはずなのに。

「そうだ……気に入らないと言えば」

私の猫は一日二回しか私の前には現れない。一度目は私の殺害のため。二度目は私に話を語って聞かせるため。

それ以外はいつもアニエスと一緒に何やら楽しそうにしている。私を殺す計画を二人で練っているのだろう。そのために猫をアニエスに預けたのだ。私を嫌い、憎んでいる者同士。その方がより面白いことになると思って。

（思っていたのだが………つまらん）

あれは私の猫なのに。私の金で購入し、私の金で食事を与え、生かしてやっている猫なのに。私よりあの女中に懐くとは……

そこまで考え、私はそれが正しいことを思い出す。

（……いや、それが愉快で飼っていたんだっただな）

私を憎んでいるあの目が良い。全てを許される私が、あそこまで

激しい敵意をぶつけられることは非常に希だ。

（しかし……勿体ない）

しかし……だ。あれで男だったらもつと面白かったのに。そう思わずにはいられない。それが駄目なら私が男でも良かった。いや、それならそもそも私はこんな回り道をしなくてもあの王の首を刈れていた。正当な理由で、後継者として、新たな王として。

本当に女は面倒だ。女と言うだけで、私は出来ないことが多すぎる。それが出来るだけの力を私は与えられているというのに、人を操り裏から世界を動かすなんて……楽しいけれど、ああ……面倒。ああ……つまらない。

勿論綺麗な服は好きだ。宝石だって髪飾りだって嫌いじゃない。だって仕方が無いじゃない。私に似合うんだもの。気に入るのは当然でしょう？

でもそれは私が着たいから着ているだけ。誰かのためにか、見て貰いたいからだとか、そんな下らない理由じゃない。

好きなモノを唯好きなだけ。その何が悪いのだろう。男も女も面倒だ。どうしてそう理由を欲しがるの？

私が着飾るのは他ならぬ私のためだとに決まっているのに、どうしてそれに気付かない？

自分のためと勘違いする男共。ああ、うざったい。よし、首を切り落とせ。

男を誘惑するために？外でも中でも勝てない女共。陰口だけが生き甲斐か？そんな生なら死んでしまえ。さあ、首を刈ってやろう。

ああ、下らない。喧しい、寄ってくるな蠅共め。
したいからする、やりたくないからやらない。それだけだ。

「殺したいから殺す。面白いから生かす。それだけだろう……」

理由なんか要らない。そこに、世界に……私の意志さえあればいい。

ああ、苛々する。眠れない。……何人殺せば心が安らぐ？足りぬ、足りない。もっと血の匂いが欲しい。

（しかし今はそれどころではないだろうな……）

流石に今の状況で城の人間を片っ端から処刑するのは大事だ。かといって外に行くのも面倒だ。ああ、面倒くさい。一步も動きたくない。私は眠いのだ。むしろむこうからこっちに来い。この私がそう言っているのだ、誰かさっさと来るが良い。今なら首なんて生ぬるいことは言わない。全身ばらばらに切り刻んであげるから。

「ち……いくら妾が万能でも、不可能ごとくらい幾らでもあるわ」

自分は何の努力もしないで、何でも出来るって勝手に私を妬んで、私を讃えて。何も成さない内から勝手に諦めて、何にも勝てないからって私を勝手に僻んで、祭り上げて。

そんなに負けを認めて楽しいの？自分を卑下して楽しいの？そんな風に生きてて楽しいの？嘘つき、みんな嘘ばかり。楽しくないならどうして生きてるの？もう、死んでしまいなさい！私の視界に入らないで！映らないで！それが出来ないなら私が殺してあげる。

「笑わせるな……」

ほら、誰も来ないし眠れない。まったくどいつもこいつも使えない。

主が暇しているのだ、少しは構え！顧みろ！

「主……か。あれには呼ばれたことがないな。いつもあんたとかおまえとか……あの女。昨日は確か馬鹿姫とまで言われたな………
…口の利き方から教育するべきか」

何のために人に名前があるというのか。あれは一度も私の名を呼んでいないではないか。

いや待て、かといって名前で呼ばれるのも気に入らん。そうだ、男共はいつも私も私を名前で呼びたがる。それが所有の第一歩だと思っ
て疑わないあれが、煩わしいったらありやしない。

そんな事で私が誰かのモノになるものか。口には出さずとも心の中で
そう思っているのが見え見えなのに、見え透いた嘘。出任せ。ああ、腹が立つ。ええい、首を刳ってしまえ。

「うむ………まだ馬鹿姫の方がマシに思えてきたぞ」

あれは本気でそう思っていた。この聡明な私を、本気で馬鹿だと思っ
て語り……それをそのまま口にした。だからと言ってそれに苛立たないわけでもないのだが。

「しかしあれも使えん猫だ」

そうだそうだ、まったく使えん。

今度の猫は、話をさせるくらいしか芸のない無能な猫だ。多少これまで
のモノと毛色が違っていて愉快なのは認めるが……夜伽相手としては全く無能だ。

「しかし……あの声は良かったな」

つまらない話だったというわけではないが、昨日は話の終わりの

方はだんだん眠くなっていた。

普段は喧しいことこの上ないが、結構私の好みの声だ。高すぎず低すぎず……中性的とでも言うのだろうか？昨日の語りはその良さが出ていた。いつもあんな風に穏やかに話せばいいのに。

両親から受け継いだ毒の副作用。どちらもタロツク王族……その濃い血が私に残した幾つかの弊害。

私はこれまで病にかかったことは一度もない。けれどその反面私には普通の薬が効かない。睡眠薬すら満足に効かない身体。かといって強い薬を用いれば、それが更なる毒となる。

（まあ、……そうなったところで私には関係のない話か）

薬は何処へ置いただろう。

*

あの足音。あれは猫だ。近づいてくる。

扉の前でぴたりと止む音。ノックをするか悩んでいるようだ。そうだな、正解だ。寝起きの私は機嫌が悪い。ノックの音で起こされでもしたら即、処刑パーティが開催されることだろう。……もっとも今の私は起きているのだからそれはない。

「何だ？妾の機嫌でも取りに来たのか猫よ。ならば愛らしくにゃー

「とでも鳴いてみる」

低脳の猫が私の心を読めるはずもない。猫らしい、唯の気まぐれだろう。

振り返ったその先で、私は一瞬言葉を失う。……この猫は、本当に私の予想を裏切る奴だ。この猫があり得ないと判断したことをいとも簡単にねやっつてのけるとは。

とりあえず私の時間を返せ。お前にどうやって言うことを聞かせようか考えに考えた時間を返せ。この脳を持ってしても一時間ほど答えが出なかったのだ、私の60分！3600秒！返せ！それだけあったら何が出来ると思う？何回出来ると思う？ああ、勿体ないことをした。

台に並ばせ、セットして、切り落として、はい次の者。係の者ができばき動けば30秒で一人、一時間で120人は切り落とせたとす。120人は凄いで？この部屋の床の一角が首で埋まる。寝台の周りをぐるりと円状に並べても面白い。何重の輪が作れただろう。

「……気でも触れたか、那由多？」

あまりの事態に私は少し現実逃避をしていたようだ。この私にそこまでさせるとは、やはりこの猫侮れん。

「お休みの所申し訳ありません……姫」

口調は丁寧。服装は私が買い与えたモノ。己が私の所有物であることを表面上受け入れたようなその格好。

口元は偽りの笑みを浮かべ、目元も穏やか。そのくせ、目はいつもと同じ。私よりいくらか明るい赤……それは私の血の色とは違い、暗い炎の輝きのよう。その赤には、隙あらば私の首を咬み切つてやるつという憎悪の炎が燃えたぎっている。

もの凄い嘘つき、そのくせもの凄い正直者。

隠すつもりもないバレバレの憎しみを隠した振り。服従する気もないのに飼い慣らされた振り。矛盾の固まりだ。その不安定さに心が揺さぶられる気がした。

「……………熱でもあるのか？」

「嫌ですね姫、熱がなかったら私は死んでいるじゃないですか」

そう言つてにこりと微笑む猫。でも勿論目は笑っていない。

「……………なっ!？」

私の手を取りそつと自分の頬へと押し当てる。掌に吸い付くような柔らかい感触。思わず何処まで伸びるのか引つ張つてみたくなつたが、勿論そんな余裕はない。動揺を隠すため、そんなことを考えてみただけだ。だって、何やってるのこれは。

頭ではわかる。生きてるから熱があるって証明しているだけだつて。それはよくわかるんだけど。

「生きてます？」

何、この顔。さつきより柔らかい笑み。優しいと言つてもいいくらい。思わず釣られて口元が緩みそうになる。ちよ、ちよと待て私。これは何だ？これは猫だ。猫とは何だ？猫とは猫だ、私のペットだ。愛玩動物だ。私は動物相手に何を照れている。これは人間ですらない、そうだこれには人権など無い、私の奴隷だ。奴隷とは物言っだけの道具だ。道具相手に私は何を動揺している？気に喰わん！

（だが…………直視出来ん）

素材は良いから困る。それはそうだ。絶世の美女の私と同じ顔なんだから。ときめいたって仕方ない。そうだ私は悪くない。悪いのは……私のこの美しさの方だろう。ああ、私ってば罪な女よ……なんてまた現実逃避してる場合ではなくてだ。

逆に今までのコレが悪すぎた。あの農民ルックス。がさつな言葉遣い。色気の欠片もあつたものではない。

それが何だ。ちよと服変えて、髪整えて、言葉遣い変えたただけでこんなに変わるものだとは。

タラシだ。狙っているのかいないのかいまち解らないが、今私の部屋にタラシがいる。どうしよう。天然だとしたらそれはそれで美味しい気もする。

（いや、待て待て待て待て待て待て待て妾）

いくらこれが女に見えないからといって。

いくらこれが私の妄想していた弟像に近いからって。ないないないない、それはない！絶対にない！あり得ない！ちよつとドキつとしたなんて絶対にあり得ない。この私が！こんな猫風情につ！奴隷風情に！農民風情に！

ああ、段々見慣れたせいもあつて落ち着いてきたな。

自分の順応性の高さに感謝。

「……しかしそうやっていると全く女には見えないぞ、猫」

「姫は本当に冗談がお上手だ」

「お前本当に大丈夫か？あれか？朝食欲しさに機嫌取りか？庭で何か拾い食いでしたのか？酒でも飲んだのか？大丈夫か？復讐に囚われて頭のネジが飛んで行っておかしくなってしまったのか？」

思わず素の声が出てしまった。恐るべし猫。

……猫が何を考えているのよくわからない。いつもに増してよくわからない。まあ、何を企んでいるかは知らないが、それはまた私を楽しませてくれるだろう。それならこのまま放置しておくか。そう思ったときだった。

(……………そうだった)

私の手を掴んでいる猫の手には「……ナイトのカードの紋章がある。ナイトは下から三番目。王と女王……それから道化師には勝てないとはいえ、他のカードを蹴散らすことが出来る、一応は最強に近いコードカードの一角だ。

これはあのゲームを有利に進めさせるためにも是非、飼い慣らしておきたい。近くに置きたい。

しかしそれは同時に私の身の危険を意味する。これが私に従順ならば、これは私の最強の盾。けれどこれが私を裏切れば、これこそ私の最大の敵。あんな賭けを成立させなくとも私は無抵抗で殺されなければならない。それならこれを遠ざけたい。

一瞬、私はこれに殺される場面を想像してしまふ。見慣れた風景はこの部屋の景色。殺されるのは、今ここで。

あり得ない話じゃない。これにはもうその力と権利が与えられているのだ。勿論抵抗はする。だが……私にこれを殺せる保証はない。神など信じていない……いないが、もしそれがいるならば、私はそれに見捨てられたのだ。

触れた手から私が震えたのがバレたのだろう。震え？この私がか？私は己の死を、恐れているのか？神に愛された娘……そう呼ばれた私の絶対を覆されたから？だから何が起こるか解らなくて不安で

……恐ろしいのか、私は。

「私は姫を殺しません……今はまだ」

優しくなだめるようなその声は、あの眠りに誘う心地良い声。それなのにその最後に付けられた言葉が私を現に帰らせる。

今はまだ。

それは、いつかは殺す。そう私に宣告している処刑人の言葉だった。

その残酷な処刑人は、私の手を掴んだまま優しく微笑むのだ。無邪気な子供のように、優しく愛らしく無慈悲に残忍に。

「姫様ともあろう方が、気付きませんでしたか？あの詩は、まず同じ紋章を持つモノを殺し合わせよ。そう言っていました。私はダイヤ、貴女はスペード。私はまだ貴女を殺せないんです」

“まだ”。先程から繰り返されるその言葉がやけに現実味を帯びていて、私を少しずつ追いつめていく。

「私が貴女とやり合うためには、私がダイヤ、貴女がスペードの最後の一人にならなければいけないんです」

この少女は自然の中で育っていた。悪魔や精霊を信じる心がある。だから……あの神の声をそのまま受け入れられたのだろう。だから私が見過ごした意味にも気づいた。

私はあれは精々どこかの数術使いの大それた悪戯だろう。今だつてそう思う心がある。あの得体の知れないシャランジア……あそこにいる強力な数術使い共が何かを企んでいるのでは、と。

それでも今日呼んだあの数術使いからは、嘘を感じなかった。少なくともあれが話した言葉からは嘘を感じなかったのだ。だからあ

れは真実だ。けれどそれを真実と認めてしまつたら……私は神の存在を認めたことになる。この不条理は、人間の悪意ではなく神の定めたゲームであると。

「同じ血同士 殺し合え」……この紋章が生まれの血を表すのなら、まず殺し合わせるのは血の繋がり深い者達。同士討ちを誘っています。心と力……それから頭。それを使って生き延びた四人。そこから最後の一人を決める。あれはそういう話なのでは？」

勿論私は考え事をしながらも、少女の言葉を一字一句違わず記憶していた。なるほど、確かにその方が意味が繋がる。

私はあれは抽象的な意味の暗号化何かと深読みし、そのせいで堂々と書かれている言葉を華麗にスルーしていたようだ。こんな馬鹿な猫でもわかるなら……これは誰にでもわかるような詩という意味だ。つまり参加者には幼い子供や学のない奴隷達もいるということではないか。国の長達が上のカードなら……下は最下層。つまり奴隷達やあの請負組織の連中が怪しい。

「猫のくせに………的を射たことを」

T O R Aは言っていた。スペードのAは父上だと。それはつまり……剣の紋章はタロツクに集中している。そういうことか。ユリウスと猫がダイヤ……金貨の紋章なのはこれらの生まれが庶民だからだ。つまりタロツクの血が薄れた者の多くが金貨になると？

「ならば棍棒はカーネフェル、聖杯はシャトランジアが妥当な線か？」

あの情報屋にもう少し詳しい話を吐かせれば良かったと、今更ながらに私は後悔をする。

その後悔に少女は片手を差し出し笑みかけるのだ。

「一時、協定結びませんか姫？」

それは願ってもない言葉だが、何か裏があるに決まっている。だって、私を憎んでいるはずのこれが私と手を組むなんて……絶対にあり得ない。

しかし私は気付く。この少女は良くも悪くも真っ直ぐだった。裏？ 違う……表で企んでいるんだ、顔に出ている。全てはお前を殺すためだと。

「私は姫がスペードの最後の一人になるまで貴女を殺さない。私が貴女の剣になる」

「敵の敵は味方……ということか？」

「勘違いしないでください。俺は貴女を許さない。唯、他の奴らにその首を刈らせたくないだけだ。あんたは……俺が殺すんだから」

分かり切った言葉をあえて言葉に出す少女。言わぬが花の風情も知らぬ、所詮は農民。

真っ直ぐすぎて……痛い。金貨？ 笑わせるな……お前の方がよほど剣だろう。金になどさほど執着もない、虚ろな瞳をしているくせに。そうだ。そこからその憎悪が消えれば何も残らないくせに。

そうだ、私がお前を生かしてやっているんだ。その炎を灯したのはこの私。私がお前を人形から人にしてやったのだ。

私を殺す？ いい、やってみろ。お前はまた元の人形へ帰るだろう。生きていても死んでいるような日々！ はは、悪くない……お前に殺されてやるのも悪くない。愚かなお前は気付かないだろう。私を失ったとき、始めて私の重大さを知るだろう。お前に生きる希望を与えていたのが誰であったかその時お前は知るだろう。

(……悪くない)

それはとても素晴らしい。甘美なモノだ。これは生きている限り私の幻影を追い続けるだろう。己の顔がある限り、そこに私を重ねてしまっただろう。私が消えた後も、私だけを見て、私だけを追い続ける存在……それは、なかなか悪くない。

背筋がぞくぞく震える。笑いが止まらない。今……私はとても楽しい。

死ぬのも殺すのも、どっちでもいい。そのどちらにしても、お前は私を楽しませてくれるんだろう？

恐怖などもう乗り越えた。後は屠り合うための快樂のみがあればいい。

「……よからう！それまで思う存分利用してやる！剣に金貨だけなと言わぬ！聖杯も、棍棒も其方を利用して狩らせよう！」

さて、今まで私を手玉に取ってくれた分を返してやるとでもするか。懐かぬ猫は愛らしいが、私は厳しい飼い主だ。目には目を……言葉には言葉を、刃には剣を。その三倍の大きさに返してあげる。さあ、その心……切り裂いてやろう！瞳を苦痛に歪ませろ！

「おう那由多、其方は今……自分が妾と同じモノになると言っただけなのに気付いたか？」

猫の瞳が開かれていく。それでも私は止めてはあげない。

「無関係の命を刈り取る悪魔。それに身を落とすことを其方は今この瞬間……それを良しと認めたのだぞ？」

猫が息を飲む。気付いてなかったわけでもないだろう？それとも

見えていなかったのか世界が。その目にはこの私しか映っていないか
ったのか？ふむ……だからといって攻撃の手は緩めない。さあ傷つ
け、砕け散れ！

「その屍から其方と同じ復讐者が幾人も生まれるだろう。其方が妾
を恨むよう、其方も誰かに恨まれるだろう。それでも其方はその手
で妾を殺す！そのために多くの犠牲を払えるか？それを是とし、
受け入れるのか？どうなのだ！？」

私の言葉を最後に、部屋は無音に囚われる。ああ、香を炊いてあ
ったことも忘れていた……鼻をくすぐるその香が、どうしたことが
今はあまり不愉快ではない。

猫は俯き、項垂れて……瞳を閉じて言葉を探す。そして私が十まで
数えた頃……猫が震える唇を開けていた。

「あんたを殺せるなら、俺はなんだってやってやる！乗り越えてみ
せる！殺されても構わない！その首、狩った後ならばっ！」

燃え上がる怒りの炎。私が今、焚き付けた。猫よ……お前は今、
生きている。生かされている、忘れるな。

「……よくぞ言った！それでこそ、妾の猫よ！」

紅蓮の炎を宿した瞳。どの宝石にも例えられない美しさ。その目
玉ごと割り抜いてやりたいくらい。

その炎燃え尽きるならば、その前に決ってやろう。それが嫌なら
燃やし続ける、その目に私を映し続ける。

「其方には力を与えよう。毒と剣、そして策。その全てを叩き込み、
最強の手駒に育ててやろう！光栄に思うが良い那由多……！」

そして私を越えて見せる。私以下の存在から、私を越えて見せるのだ。諦めるな、失望させるな、私を殺したいのなら這い上がれ！そして……ここまでおいで。

（来れなかったら……殺してあげる）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615h/>

悪魔の絵本3 女帝【逆】（タロック編?）

2011年6月5日17時11分発行